

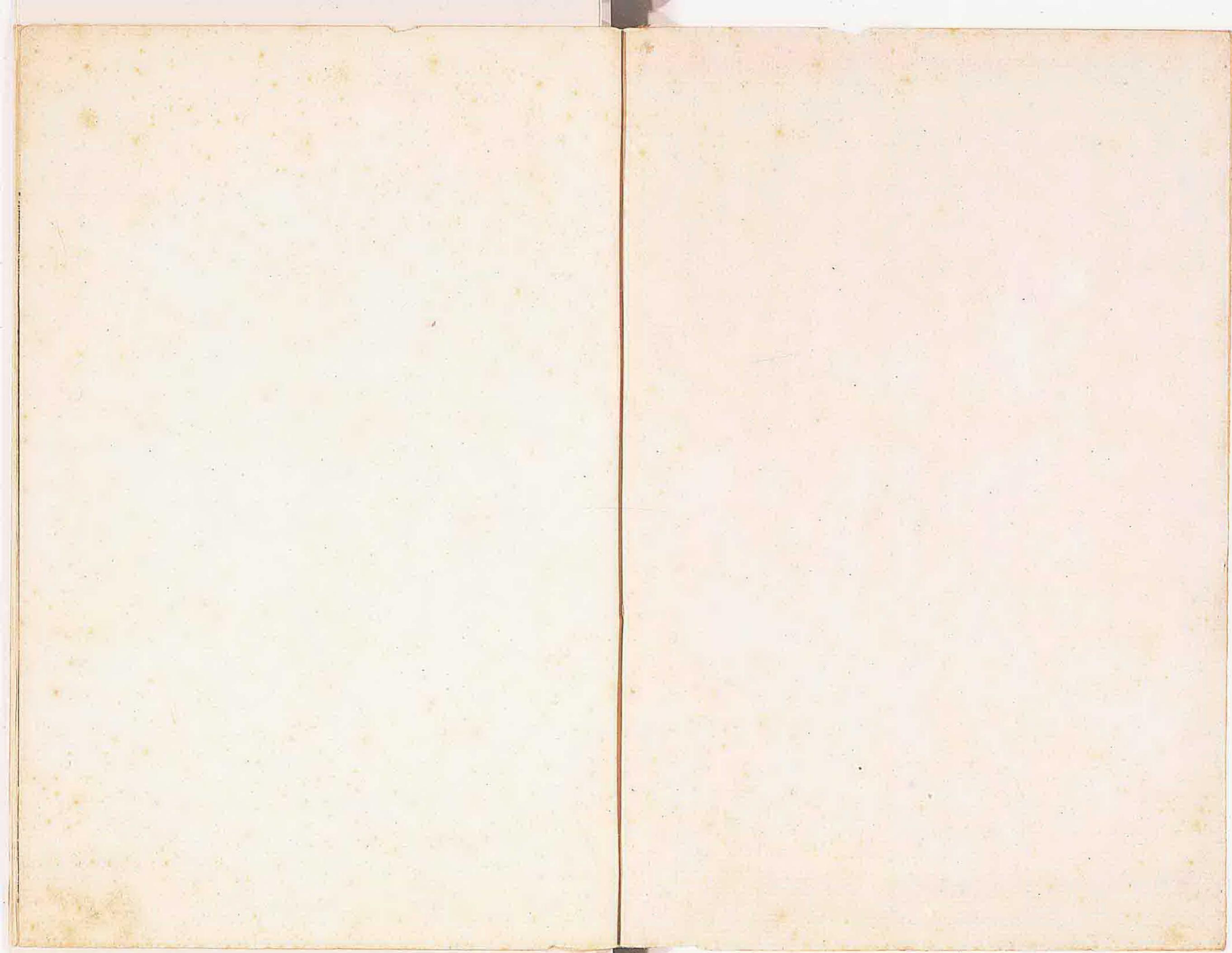
20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5

補 增

恩 谷 所 集 傳



1290.1
#4





序
 恩之地汝野遼潤荒河繞於南刀水
 橫於北窗峯之雪映於筵波之霞沙
 嶽之煙接於日光之雲靈山遙注自天
 淮近護駕城吾

公之移封於此也恩雨仁風徧被於庶
 草貴護教而歸美焉同鼓樂以相賀
 焉松村竹里日增人煙之稠桑畦稻疇

曾以此為唐之地戰國之時成回氏據
此以為北條氏扞蔽也兵火烘天馬產
漲地伏尸積野暴骨不葬嗚呼何
其慘哉恭以

神君洪德一紓天下以為昇平擊壤之
世殆二百餘年矣今之人安其所安見
其所見遊蕩為俗淫逸是務示嘗知
寧土危倒懸之苦矣吾

公封內之地舊祠古剎絕勝名區竄在
不少考然而干戈爭鬪之餘其詳不可得而知
也

公之匡世作岩崎二子好事之士也休浴之日
帝奔走於東西閱日記徵口碑又卷之
於史乘搜索殆周而圖之誌之數年之久
寔為卷冊繁然世不備具吾古成飲之北
公其壽之命也序其卷首美

公之喜之者非但喜鄉里之富田畝之縣隸地
之美也感昔时而者今日鑒既往以戒將來何
則至治之契必至於奢世謙者此哲之所然也故
能去其所以然以張之弛之不使至於敗壞
則永受無窮之福然則是書之益亦大矣哉
天保乙未初社中元後言

臣 芥川通謹撰

洞李香沐り古くは是比まか人の傳りも取らんとして如き一息在
原國會と云ふ一巻の何れ哉 君に控ぬは言所小豆くぬと云ふ
おれたる事もその事りも惜しこおほは何なりおれふも補書
御をりし 作あしとがむりぬが程方拙く知ると是くの哉
身のうらむわさのいの傳と、思ひ多うすのりし 作あとのかまされ
はけのふきぬきりてあり日とあかたをを地よりを我あおる
高寺の縁祀社傳を免何の因之に一漢出らるるもたは同じ
ゆるに文とのふたしをくおれり思ぬ考証を加入らうり作是
いそふ巻とゆ増補思名所國會と題しをならふと小なうぬと終
とも濃れたるも程多うりぬとれらるのちの物語くし身は強へん小
作とす補せたあしんをを法とあつる小おれ押さるるこの以てまぬ

中七 所ある高畑のうらうらと年甲うらに四の民くそとらるにたの
しむ何まうのぬん

五保の六のうらぬ月

長客うらん

九例

一 此書に徳く洞孝香高の思名不固會小漫たるは増是をぬを補ふ
本書の一字を上げ補修するに字上げと 延生(増) 訂加少るはの讀者
の見安き人あり

一 本書小諸寺院のむのび年承歌とふのそ載たれとむる用
たる九の省て記され

一 神祠佛寺多しといふも開基建祠の時代古くは載て集書
者あり

一 祠祭の記等ハ後世の記したるも有るは九の盡く任かこりし

云へども古くは記したるも有るは九の盡く任かこりし

一 本出小載る因縁して記したるも有るは九の盡く任かこりし

一 神祠佛も小左を記したるも有るは九の盡く任かこりし
記しよ

一 此書に流傳する所の古書奇蹟等ハ其所の古老の口碑も傳書も故
聞き小流し高虚實を補修し

下

浅间山

西

林

河川

御所

日光

河川

忍府

御所

東

筑波山

南

雅政改武蔵国云々

○埼玉郡

増按る小和名抄小武蔵国埼玉郡延喜式神名帳

武蔵国埼玉郡小四生前玉神社云二生此郡古くより埼玉といふ云々萬葉集

小佐吉玉云二前玉云二といふ是和名集小異形伊喜云二ハ相通は相通云二ハといふ

とら等形云二埼玉の字義異形利云二武蔵国国分寺の中云二

埼玉郡古瓦云二武蔵国郡此在云二物多あり其形字云二たる書

の中



此尾極て古代多物云二古より埼玉字を用ひ云二と見ゆ志云二を古くより

埼玉郡といふ俗説あり誤る也云二延慶の頃より天正の頃云二の文書云二埼玉

西と云ふも之をたゞ埼玉と云ふは即ち西の意なる也云二葛飾郡云二在云二今武蔵地云二西を首云二と云東を首東と云ふ小前云二おきハ中云二と云ふ也

○悉云二又云二悉云二此地名古く東鑑云二建久元年二月七日將軍云二頼朝上洛云二位

家行行列云二三十九番別府太郎奈良五郎云二四番岡部六郎大瀧瀬三郎云二五

番四郎悉三郎同五郎云二又建久三年の条に三月四日將軍云二頼朝御上洛云二全

九日名清水御共詣御隨兵云二岡部六郎大瀧瀬三郎古郡次郎云二と見えたり

別府五井等云二いふ事も多し近き地名あり考ふる小悉三郎云二駕三郎字異云二

也云二とも訓云二お前云二と云ふ人あり事云二悉云二思云二の地名ゆ云二く云二なり云二事云二七

亦是より一里ぬき別府五井奈良小成田を加へて武蔵国成田の家云二

いふ後河原下云二の条云二小出云二依云二此地名思云二は云二といふを傳云二ふ或説云二成

田長云二の室の秋云二と云思云二は云二思云二ひ云二あり云二ふ云二う云二縣云二と云云二事云二なり云二

を一の部 あまの松々下遊河川の内加藤白門前の並本しと 郷といふは大

里の里を統なるをいふ いふ又浪虎組に赤前の松とていふ説も所見少詳

島の山に佐河下思持田等成属とて一山と名付物なる也 早中古より

およも此の石見とて 此河より北は傳の根此莊といふ 莊と名付るを

廣くして南に吉見邊 荒川向を 是成云ふより又血尾村より北より

井店と名付庄の内より いふ名河より 並と云ふも此河より

畠の河より いふ此井庄に 幡羅郡のより 今の此井村なる也 彼地はむ

藤實盛の住 あり 小松内府の莊園武藏水井の莊の別当 不置

人皆智 よ 大田庄に 長野村のあり 東村 二七里の河

が 河 悉 より 五里 より 其の方より 其地小松 龍宮の宮と云ふ

の 比 地 より 名 より 味 より 東鑑 不 武蔵国太田庄 就 官 血 流 云 杯 足

たり古き 神祠あり 事又在田庄といふと古より 其地 龍宮の宮と云ふ 証あり 藤根庄 未考

今ま 此 多 く 小 羽 生 領 吉 見 領 と 夫 の 領 より 河 より 龍 宮 領 と 天 正 氏

羽 生 領 に 井 江 某 後 大 久 保 某 候 吉 見 小 上 田 能 登 守 是 昔 の 領 地 あり

其領の稱の今 小 羽 生 領 の あり

○御城 増 往古 悉 三 郎 といふ人 あり 代 に 居 館 の 地 あり 延 徳 二 年 成 田 下

總 守 親 泰 愛 の 稱 位 新 小 城 成 築 と 天 正 十 八 年 成 田 下 總 守 氏 長 大 樹 秀

吉 公 少 降 る 秀 吉 公 関 河 也 神 君 小 冬 と せ たり 小 平 後 松 平 下 野 守 忠 吉

頼 臣 一 是 を 小 平 慶 長 五 年 以 後 日 番 城 寛 永 十 年 松 平 伊 豆 守 信 綱 候 居

城 同 十 六 年 阿 部 豊 後 守 忠 秋 候 代 に 居 城 之 也 又 文 政 六 年 より 已 來 吉 口

君 居 居 城 と なる なり 城 地 の 瓦 光 堀 上 に 松 杉 榎 桑 茂 し 樹 上 より 旭 子 映

して は 常 盤 の 色 を 現 し 凡 小 石 若 ま 八 子 代 の 初 と なる なり 堀 外 の 深 汎 水 波

源とて一して大湖小舟一々前項録せたる水上の皆譽鳥雁翻
翔一金鯉銀鯉浮遊して樂也、是皆國家象代の瑞祥ゆゑ古の靈
沼靈泉と云ふ也

成田記曰大職冠鎌足十二代の後胤緩小路右近少將義孝朝臣之嫡権大紋
言行成の子二男忠基武家と成り武藏下りて幅羅郡少佐其子男暢
羅太郎といふ男を以て成田の地を稱し地名成田苗字と成田を夫
といふ後式部大納言任以伊豫守頼義の叔父其男太郎助廣といふ二男別
角二郎行隆三男奈良三郎高長四男玉井四郎助實と云各近少分君に
稱す世替り小随て各年首の勢ひを以て是を武藏國成田の四家と稱す
應永の末より文明の迄小随て成田の武威盛なり三家九幕下り属一終
に陛下の例をもとれ此助廣より五代の嫡男土郎家時文武兼備せりは成

田家倍繁榮其應永七年三月七日卒嫡男八早也一子二男土郎左衛門尉
資負家を継ぐ生隋弱き一子淫酒を耽り永享二年九月十一日三十二歳
小して卒其嫡男大九郎頭泰八歳少して家督を継ぐ臣補佐して立之回
十一年足利持氏上杉憲實を争ひ小遣ふ此時顯泰七歳なり一が上杉を争ひて
軍功有り持氏憲實に和せ乞ふ尚維染せしめて鎌倉永安寺にて持氏生害
有り翌年顯泰去年上杉家を討つて拔羣の軍忠有りして管領上杉清方此
吹舉依て下總守に受領し後尚數度軍忠有り文明十二年家を嫡子太
郎次郎親泰小譲りて其自ら隠士となり剃髪して清丘入道と云親泰成長
よ及んで鎌倉有るり應仁十八年上杉定正功臣太田道灌を謀代之刺頭
定正と懇し定正小分力有り親泰も軍小随ふ此年親泰下總守に任じ
爰小道に思ふ地は地理あり一子女連年望望に思の大亟ハ太田道灌

と縁者なるふりして黙止して有るが久道灌滅亡して定正微勢となり
延徳元年西家既確執不及ひしに親泰時来りぬと歡ひ顯定は誣一時
責りぬは忍大逆力尽て館子心なりけ一族ふとく必なりぬは延徳二年
より城の経営より取り里翌年成就して爰より移りり大永二年の夏親
泰は嫡男太郎土郎長泰の家を譲り法伴して宗康庵と稱し幡羅郡奈
良の里小隱館を建て轉居畧長泰は享祿年中中務少輔に任官其嫡
左馬介氏長共小北条家を爲して教度軍忠有り臣子違りぬ武蔵の旧家と
稱して北条も是を會統する事親属の如しと按る小成田家は足利左馬
頭基貞より代り菅領家の幕下ありと松靈政越後より赴きて後小北条氏康
に属せり石原村民家に傳り成田家傳と云ふ書有り証と云ふも是より云
へとも據有る書ものありつと暫爰より出して考の九つを以て成田記
と合考考へてあり

成田家傳

武蔵国より七堂河より丹の寺と云は宣化天皇の末孫丹治の姓より青木勅使河原
安保より横山堂猪股黨に敏達天皇は赤葉小野姓より茨野岡部横山是也
見玉堂は藤原姓より本庄倉賀野是なり私堂は私市姓川原久下是に
其外は大概亡びて今も又一家と云はり其外は忍の成田是に先祖大脚
冠三代の後胤綾小路右近衛少將義孝子二人あり一男は六納言行成今世尊寺
の祖也次男は武蔵守忠基あり忠基より五代の孫を武部大輔助高と云武
蔵国司と成て幡羅郡より任り時の人幡羅の大庭と云此助高は伊豫入道成之叔
父也我より頼義奥州貞任宗任追討の大將軍として下向り武蔵を通り
時此郡へ馬を寄る諸士悉く出仕り此時助高は大将頼義へ参りんと出馬

一頼義も助高の誼へ参らばしり途中して河邊の助高下りて禮儀頼
義も下馬して禮せり助高は頼義の叔父なる故に双方互小下馬の禮あり
成田家々小至て大将対面の時互小下馬して禮は此家の作法なり此助高
小子四人あり一男成田五郎二男別府三男奈良良四男玉井とせり
別府を左衛門尉行隆と云行隆小子二人あり兄は左衛門佐行助弟治部輔
義行あり兄弟二人を別府と云義行の子は別府太郎義重其子行重壽
永之以源義経に隨ひて谷の先登一鎌倉殿より勲功の賞小給此家別
て繁昌氏はより北南といふ苗字の侍多かり
北河原如此根本一なり
南河原
嫡子度子庶然として分明なれども末に至りては成田も玉井も奈良も別府
も皆午南の家より繁昌氏の家の下知を安んずるは文明年中と成田酒卷
兩別府久下奈良玉井酒賀忍北南と云地侍何處も午南の侍として公方管

領の下知小隨ひて其後因事大乱れしり成田下總守入道宗蓮忍小移り
ハ近隣の諸人變良しり夫よりして忍の城を築き置る小北城河の中流れハ
造作をありしりありしハ近隣の諸將へ毎年人夫を雇ひ多年中して
此城は要害を有るは初皆頼義しり故小人夫を雇はり後より新造て
数年以てされしつとあり自然小宗蓮へ役を命じやる小あり是等皆
彼下知に隨ひたり宗蓮一代の中近隣の諸將を下知し其子下總守長泰の
時分小地侍千騎の大將とありしり公只威のばを命じは臣面も変ありと

小田系小宗氏綱の批判有りしあり

増 御城の地形屋鋪等の古板を考ふる小今の所は九三の丸より東に沼橋を限り
南に下忍御門河を限り西に田町外矢場邊を限り小城守りゆき是れ
谷々村旧地小田地のちぢれしり此城地と云今の内行田小谷等と云

又今の成行田の久伊豆明神ハ行田町の鎮守し是ハ古き社子て此辺町まで有しと見る社の東へ向ふ少く考ふるふりくハ本町田の迫り有り
うと思ふ都て鎮守或ハ防の神とて町のせまり或ハうへへの隅小なるも
あり有れり成田記ハ大手口五尾外張持田口外張ふと書きと今の株
とハ古なりへるありう程考ふ身ハ今五尾村子外張とハハ外あり若杯
可ハ所りあり

○増 諏訪大明神 市本丸側廓ハ鎮守あり 諏訪助輪とハ神祠有故 御当城の鎮守あり 神祠四座 中大諏訪大明神

左 縮荷大明神 八幡大神 右 天聖自美神宮 当社宝物塗重藤の弓 矢葎茨内紋時繪有り

各忠吉朝臣より奉納しと云 祭神徒御名戸尊 神主 高木長門
当社歎請の年月詳ふられ社家の説ハ 御城築りをもく有しとふ又
俗説ハむのハ持田村小有ハ愛小近ハ 御城地持田の地ふ故せと云

今同村小字 沼尻といふ所ハ諏訪の旧地あり 同南条と云ハ所ハ神供田畑あり

○地獄橋 北谷より帯曲輪ハ掛り橋なり此橋ハ浅間赤城山等の寒風

吹舟少く殊の外寒ハ甚ハき時ハあハ落ハともあり依ハ名取りといふ
俗説信用あり小豆下江

○縁切橋 上荒井より内矢場から橋成り小川成田氏長小田原出陣の

時内室家臣等小別を惜ハ所也と云ハ今世嫁ハ行者此橋を渡る事
を思ハ氏名の如ハせらるる也

○増 成田記ハ此類ありと畧ハ日書ハ退城の時諸士女丸を伏拜シ君臣三

世の縁ハ是限りありと落涙セハ所ともいふ

○鉦打橋 沼尻より袋町へ掛り橋を云ハ所謂むら

○増 按ハ小鉦打橋ハ下忍所門外張り百石町ハ橋をいふと云ハ今水野某

屋舖山田某下屋舖の辺昔鉦打聖と云る者住レ故俗ハ呼ビ習ヒ物ハ多ク一ツ固シ鉦打聖といふもの一ツ遍上人諸国遊行の時帰依の僧侶教多有り中少も薪水の役をさせし者有ハ何阿弥と云をいふと後或法術ハ又俗信シ阿弥と号シ念佛行者とありて鉦を打て諸国を修行を俗呼ビ鉦打聖といへり今も在ル処ハ小河川則此所ハ住シ鉦打も後に埼玉村小住居ルあり

○秀衡駒鞍松 江戸町島山某庭中小河川 往古秀衡此処を通り

一時駒を繫キ休ム処ニと云り由縁詳ク後

○増 按る小大木なるも星霜五六百年の物といふは後世植續シものり

志ハ多ク

○浅間宮 同所伴某の庭中小河川 忠吉朝臣歎請シと云

○増 多度両宮 帶曲輪小鎮座 文政九戌年

君候勢州桑名多度山より迂リなる

○増 東照大権現御宮 下荒井小御鎮座 文政八酉年

御造営 御別当 摩振山 金剛寺

○御城下 町割有始 詳クいふレ今ノ本町ノこと云フ氏命新町

下町寺町割ありハ坐ル

○行田 町の惣名多異に業思作ル 今ノ下町新町大正町等の町名あり 今ノ寺ノ行ノ字ヲ用フ

○本町 古園ハ行田本宿と稱ス 今ノ新町ハ行田横町筋と稱ス

此地ハ日光海道の駅ニして江戸より路程十五里北ニ新郷宿ハ二里鐘林ハ里西ニ熊谷ハ二里あり諸国ノたよりとシ市店ハ諸国ノ産物ヲ貯メ毎月一六の日市を立テ諸色ヲ交易ス此市ノをシ地ハ天文十三年辰巳月

六日ありと云り

南之方

○手田山清善寺

洞家成田龍洲寺末寺領三十石

惣門横額

拓華林
指月印書

茶師堂門の向ふ河通大師堂

石碑 唐画の河通大師の像
を利裏の銘ハ北山也

石橋

門前ハ楸の青ヨリ一枚石あり巾一間半堅二間余
也宗尼村真歡寺岩窟の扉ありと云

○増 当山ハ成田五郎家時長子五郎左門尉資負の二男成田形部少輔顯忠永

享十二庚申年草創龍洲寺五世の僧を招して爰に居りて其後松平薩广

守忠吉朝臣諸堂塔御再建可也

○天満宮

佐間村入口あり神体春日の佐古木の梅社内ハ此梅大木あり凡二圍

とあり高き漸き間斗いの隙みや雷火の為小悉く焼てその國のをもくまあり

よそ中ハうらあり近年天中より若木生出て繁茂一八重の白梅咲あり

みつの沢より神木と移来あり別号

慈眼山

安養院 下忍通照院

○天真山高源寺

洞家清善寺末

○正木丹波守利英之墓

日寺門内照あり

天正十九年天三月初二日

碑面

當寺用基傑宗道英居士

成田下總守殿御家臣正木丹波守利英

○増 正木丹波守利英ハ成田家の老臣し天正の籠城ハ佐間口の大将たり大手口

難儀の節行田口より町に入て寄手の石を切取陣中ハ返忠の者あり

云ゆりて大手口の諸將方を得て共ハ敵を退退けし利英ハ軍謀

是ハ依て大手口の諸將方を得て共ハ敵を退退けし利英ハ軍謀

とも云し其歟所の軍忠有り爰ハ省く

○沼尻

○増 沼のありハ其のありハあり行田より松山への律還 今歩卒
屋あり

此河より望む小沼波蒼蒼として大湖小等しく松林繁茂して
大山の如く柳柳当城いづより望むと云へとも見るあり只此沼尻の
女牆粉壁樓櫓の瓦をそのも天文の以上松謙信当城を攻めざるれ一時
此河より望む城中の形勢を巡視せしれいづり成田罷天文廿二年壬子
三月下旬より西上州小馬を出し北越の軍勢城外に詔寄れ
城の要害無双ありて四方深泥みみち容易に攻進く事能えん
是ふものて大将謙信自ら大物見として佐間下忍の方へ乗廻り城中
の形勢を巡見しぬ城兵大将と見ゆ幸に打面とも鉄炮の手たれ
十人一度おぼしども謙信の身ふりて其時謙信馬の鼻を城
の方へ引け扇を用ひあけく白眼て静しと退りて城中
にも其勇威を感賞しなり時小天暗く俄小雷鳴りて風雨烈く

十日軍ありて翌日足輕を遣て追合けり双方手負死人多く雌雄未
半のまよ小戸君の大石源左三門尉入道より羽檄を飛せし條氏康豆相の
北軍を率し小田原を發出し忍の後援と申間へ又東上野厩橋必張
とも聞かざる実否いさく不定なりといへとも註進仕りも有るれ謙信如
何思ひけん翌日田を解平井の城へ引取ると云こ

○富士浅間大明神 崎玉郡入口右手山上小河より女人禁制の礼建延喜

式内の社あり神体鱸魚小乗ありと云当村の出生神し氏子の者小限るは当
村小住者鱸を食ふ事と禁むるは後て人食は必凶なりと云り例

祭六月十三日三月念日神樂修行也

○国王山西行寺地藏院 天台宗東都上野末九墓山麓小河より

本尊地藏菩薩 長三尺斗忠泰和尚作

増夫当山の用基ハ人王三用明天皇の御子聖徳太子の舎人調子麻呂也

推古天皇の御宇太子甲斐の驃駒小乗て駿州富士の嶽小騰る舎人調

子麻呂唯一人日之小随ふ太子山頂に於て四方を遙み臨み其いよ曰是なり

東小当て此際雲變難なる處あり今推量る小武蔵国埼玉郡あり

彼所ハ必佛法東街の霊場なり吾明年死ん汝調子磨吾の廟を此所

小建朕常々尊崇する也此菩薩を安置せよとのたまふ此地嶽の南

嶽の思太和尚浮屠氏と説小聖徳太子此和尚の化身と云の作し此時の彼太子の像今寺小存也

焉 推古帝廿九年二月己丑朔日夜太子班鳩の宮小葬り給ふ王臣百

姓の愁歎いふ斗ふ此月河内磯長陵小葬る帝遺言に任て調子

磨御遺骨を首に掛て武州小下向一埼玉の郡小あり何所を所墳

墓小定んと彼方此方々尋求小心の苗る中より小今の磨墓の地

小亭て御遺骨磐石のふとを重くかりてあつた調子磨是を太

子の御心小叶聖徳太子と則御遺骨を納め堂を建て伴の地蔵尊を

安置一又二字を建立して國王山地蔵院と号す人王三十六代皇極天

皇二年十月蘇我入麻大臣兵を率いて聖徳太子の御子山背大兄王の

住む小班鳩の宮を囲て攻戦ふ大兄王討給ひ敵の骨を以て寢所小

指置子弟三人を將て竊小騰駒山小隠れなす小兵とも火を放し宮

中を燒炭の中骨を見し王の燒死たるといふ圍を解て寺以其後子

弟二十三人班鳩寺の塔中入て誓て悉く経死に香煙氣を以て天

雲小通一男則天仙と号し女則天女とありて煙雲小駕一西をさして

死去む小調子磨又大兄王の御遺骨を取て武州小あり太子の御墓所

小御遺骨の寺を西行寺と号し是は大兄王西をさして此寺あり

故不考し又彼墓を磨墓といふも、調使磨の建立せし故なり
人王三十七代孝徳天皇の沛宇天王寺に於て靈鷲山上宮太子の像を作り置
此序小上宮太子の廟所武州埼玉郡西行寺へ寺領五十余町を寄附給ふ
是太子菩薩の爲具國家御安への事、巨勢磨帝の仰小依て寄進
状に載らる也 皇極天皇二年西行寺と号し、此寺終小断絶す
約り小永録天正の兵火に延焼燼とあり、氏后山の麓小小堂一宇を嘗て
彼太子地蔵の二像を安置せり、今西行寺是也

○丸梅

西行寺の東田圃小あり、方四五間繁茂の白樹也

太子の舍人調子磨當寺を草創して庭前小植し、此磨の像か

○磨墓山

小山し、嶺小地藏堂あり、麓より四五十間双皇、天正年中忍城

水攻の時石田三成此山小本陣をかり、城中小石火矢を打入んと、窺し小城中さぐ

うに見へて、誤て下忍遍照院へ打込たりと、此山より城中まで、路程九町も
あり、山より上より行田を望む風景あり

○増 永録に、本年上杉輝布入道謙信が城を攻むの時、此山小登りて城中

を觀察す、成田記小
見石

○増 海東山天祥寺

齋家崎玉村の入口にあり、彦家御代への御菩提

所し、天保七年 君彦より御造営あり、處あり、諸堂塔壯麗小

して、異香氣氣、清淨寂冥なる靈場なり

○可見才藏の墓

天祥寺門前松林の中、可見氏、福島家功臣哉

勇人の知る處あり、後阿部彦小事之子孫、今も此森の竹木、少くも
取れ、本崇ありと云傳ふ

○増 埼玉山盛徳寺

日村の東、これより、新義真言長野村長久寺末

当寺ハ平相国清盛公の建立ありと云々又云重盛ありと由縁詳なり
といへとも古刹と見えし今も中よりさありののり付たる瓦爰彼
所より掘出せるあり此瓦至て古代の物と見ゆ時代其中大同元年の
未考文字ある瓦一枚掘出せし事ありしと云清盛公の建立といふも
再建日やむづむの相考の由



○小崎沼 村のちつ流田圃の中よりいさゝかあり池あり側小松一株を植
碑を建古れ名所あり事ハ人能知る爰より終る小漸星霜累りて既
葉羽蔚のうちよりくま矢をんしせしを先城主ぬのまを是を惜して永代
不朽の爲として碑文を建置せし也

増 碑の名

正 面 武蔵小崎沼 篆字にて書

古所名称武蔵小崎沼即是也 所考證
以方葉和歌集矣自寛平五年 癸丑歲
右至爲八百六十九年 盖可知其古、矢此
地紛紜葉蔚中而既爲隱其所天豈可
不惜耶於是勒其地名於石以爲不絶

不朽云

見武蔵小埜沼鴨作歌

前玉之小埜乃沼雨鴨曾翼霧已尾雨
零置流霜乎掃等有新

武蔵国歌

佐吉多満能津雨乎流布補乃可是乎
後伊多美都奈波多由登毛許登奈多延

曾根

右萬葉和歌集之歌二首

宝曆三年癸酉歲九月望

左 武忍城主玉褐阿部正因建

臣 文国平岩知雄書

増 ささ暮る湯清小亭何玉の池小からゆゆも秋涼の 定家

増 ささ暮るのたささの池小咲花にあやめ小まきら杜若の 清人 未考

増 比村及び若小玉村下長野村のくく小き山形のもの凡そ本々所と有

おと小当村小有物ハ大あるがまー里佐志丸を自塚といふ按る小

此塚ハ皆自然のりものと見えん築きあせり物あへん敷試み踏ら

し見ると音ありてうはらありもの如し今其思ふヶ掘崩たるを見る

にいばまも大岩あり置なるせらものあり土人等云此中より鉄物又

環杯の類有しと云ふ小見村観音山より堀出せし物を見たり唐銅

少し作りたる飯櫃とも見えし丸なるあり底のうらに余程朽てあり

蓋も有り極し古風なり物あり考ふると往古貴人杯を築りて墳

なるんをみく考ふるよ此阿くりのいふ限るは幸なり山形の有る依
て産を掘設一なるう志くは

増 当地名産と稱る辛味菜菔此村にて作る他は移極て必形狀
風味も尋常の物となるといふ是風土の志ありあむるは飲年毎小
君彦なり

宜へぬ一鈴小是し風味他小要あり形莖葉小似て大なるは一回一尺余
し阿り美火よ此水は味苦一生じてなる一用ゆれは殊小上品なる物なり
惣一して此村は畑多して四時作り出たは野菜皆行田の市小ひさく
小と小菜菔落他は小勝じて風味佳なり

辛味菜菔



増 若王山 村の東倚田南の中より此山も岩窟有り近以此山に

岩崩きし時中より太刀之金物或ハ金の輪杯出し事有り太刀ハ一握のすしり有りハ悉く朽果て金物の之類は有りし此山ハ

名族の由始硝蔵建

増 櫻木坊 屈巢村左手小あり本尊茶師長を尺をり行基菩薩

の作り別当 医王山日光院

京都聖護院御末寺建長六年相州鎌倉平元帥北條相摸守時頼

朝臣之建立也閑山廣安寺廣林僧都あり永仁六年戊二月一日近家

と中興基廣安寺五代の孫日光院宥賢法衣之文豊二年寺焼失

日三年再建一日光院と号け天文廿年子六月近代正十九年

十一月

神君当地御放鷹の時御鷹控れたりし小境内の榎木に留居りしや

此の時帝感存りて悉くも寺領御年不花榎木坊と号を下し

賜りし元和年中御朱印焼失に櫻の本ハ今に庭中あり

靈寶

茶師如來運慶の作不動明王 弘法大師の作 毘沙門天 護法親王 立像一尺七寸 法筆

○ 観音堂 日村の左手小あり本尊馬頭観音 長一尺二寸 別当大悲山 作不知

観音寺此尊像の由縁加卷肥後守清正朝鮮陣中まゝ或ハ秘藏の馬

つりし鎧林の城主福島左衛門大夫正則方へ給ふ歸り小馬此所にて懐依て

若干此金銀等を里正小寺にいたり遺にへきしを頼し下人共ぞん

残し附置られし小彼里正極て貪欲あり者して彼下人共をもかき免て

其小馬を打殺し多くの金銀等を配分り然るも小此夜里正をたて免

一類眷屬小多きと悉く狂乱を依て馬頭觀世音を安置し少のく
祈念せし小後快氣せしと云々

○此村名の義はむろし大木を就寫大木へ巢をありら近郷の子供を取喰ふ爰
小同村榎本坊普濟寺西僧立合祈す所の然る何爰へ逝きしあり
夫より村の名を呼とせ云々

聖天宮野村の中程右手にあり別当胎智山満願寺長野長久寺末
本尊不動明王長作あり

○増堂前小大木の簾椽有り垂絲長くして花の以遊艶なり

○堤根松原 堤根村より小あり鴻巣への往還あり俗に百本松と云

○増八幡宮渡柳村東裏畑の中あり土人云郡鎮守として元々年小も
ありぬ古社ありと傳ふ小神祠二社あり一社は若宮八幡宮一社は稻荷

ありし三延喜の神名帳に載る埼玉の神社二座とあり是ありんあり

前小あり埼玉郡の浅間祭神一座ありて尤さる白縁とあり此社に

二社ありて殊小古くあり新鎮守と云傳へところを以て考ふる小式小

載るも是に合し居云古社今皆八幡神明稻荷杯小限なり

ありしと則是等し其類あり此の社のありりも字をも八幡と云

又おもふ小此社あり埼玉村との地尺寸を隔りしをれは古に埼玉村の

神社ありしありしを考ふる

○醫王山遍照院 讀下忍村少き町家の裏にあり寺領二十五石御朱

印本尊大日如來長作ありに金毘羅当寺入口あり靈驗著くして

晴雨をいれ諸人間断あり正五九月太く神樂修行あり此日に於て群

参り薬師堂寺内の東倚にあり秀衡松門前左手あり松一株を植

碑在

秀衡松碑銘

增士人傳謂忍城東通昭院者陸奧守秀
衡所建或疑奧鎮守府距此數百里非
其力所能及也按東鑑秀衡據數世之
資為羽陸押領使殷富尊榮當時無以
維鎌倉之源右大將猶要脩葺好况三
世相續信淳屠氏其所經營佛寺甚多
苟舉意興造豈憚遠乎然而院之所以
與者蓋在松樹土人又傳一年秀衡過
此憇道遺之松根愛現不能去乃於樹

以建立一寺安其所懷以護身藥師像
焉而後六百有餘年樹益森鬱人呼謂
秀衡松有旨醫鍼鈞者沈靜穎敏非常
人也一鍼之術足以療百瘡嘗過樹下
忽聞濤声有所感悟焉後三歲享和癸
夏六月雷震于樹枝斬盡其害於是鍼
的追念松声之起予因余工暇其全形
扁之藥師堂捐而恐木猶易朽也欲建
碑傳之無窮來乞銘銘曰
孤松鬱々已六百年竊鳳張翼蚪龍騰
天四時含翠岳加百塵陸侯管日于此

留連枝葉東靡遺愛可延何國一朝化
 為灰盡濤聲有鍼的也恨震天籟曠予
 因如父母傷其摧悴不忘不負術難救
 匡王不守嗚呼命矣孰之咎此碑一
 建豈千歲壽地久長松手不朽

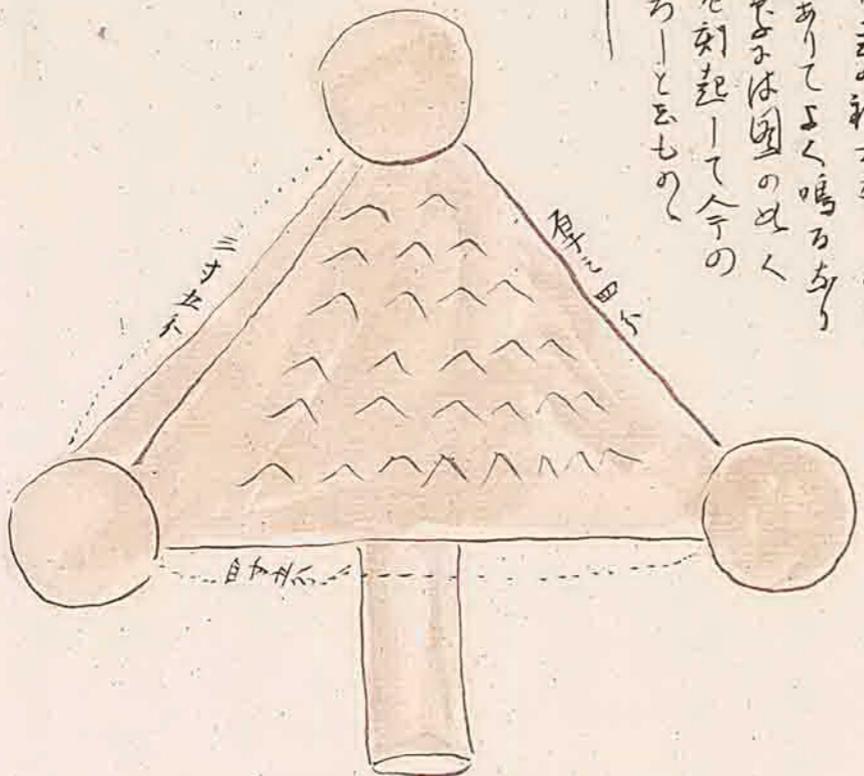
忍藩儒負眉山 佐阪通恭撰
 日藩退職震鳴 秋山晴與書據篆
 文化七年次庚午四月甲申朔八之日辛卯鍼科

中野鍼的建之

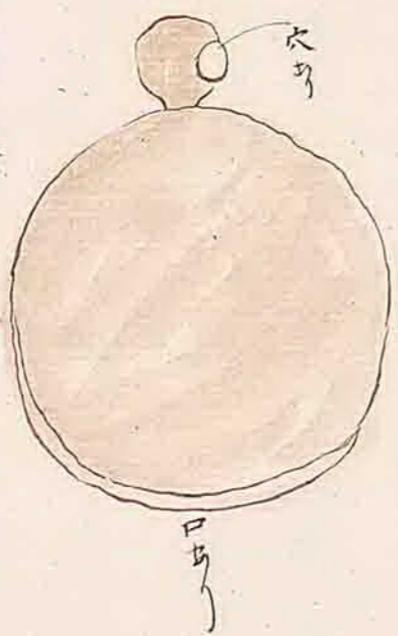
增 此松享和年中雷火で焼たり若木を植續人と舊根を堀り一に
 其下より此鈴を掘出せり圖の如し

古器

からの社よと多人を交たわらぬま
 の神ありこの鈴を堀り一に
 中子物ありてよく鳴るなり
 三角のそよは國の如く
 地りねを刻起して今令の
 山葵を堀り一と云むの
 事と



柄をぞり
 穴あり



貫二寸

此畧何といふ事を志すは天和三癸亥四月十一日高崎領上州群馬郡
保渡田利畑の内大板の下より草師佛と共掘出せしと今月村
西光寺と云へる寺にありし畧を記す是れ類する者なり
尚博雅の人より聞かす

増 草師如來縁起曰抑当寺草師如來、行基菩薩の御作に御服に
日月二菩薩立神將を安置を往昔に奥州信夫郡信夫に立せたま
ひ、その其に奥州平泉の城主鎮守府將軍藤原秀衡卿に仁安元
年春よりなりける眼病を患ひ寸間見えざるに草師も験なく至難
の折より南部盛岡の城主盛岡信濃守謀畧を企て、戸崎見次郎并出
羽国山形之城主山形常房を誘ひ、秀衡の眼病を窺ひ此虚に乗じて
秀衡一家をこゝに奥州を争ふ入ると軍勢を催促せしむるを高館

次郎聞知秀衡の元一註進よりいふ是れよりて于息三入衣川の関
へ出張し土居柵木を曲く防戦の用意を示し、此時秀衡卿御守水
尊おれ草師如來へ心願を立、七日の断食をおこし、何卒佛力を以て
眼病不日に平愈おさし、之を一心に念ひたまひし、利益あり
らば、して満願の日、余りく眼中雲をれ速に全快あり、衣の関
へ出張し南部の大敵を追はし、是れ依て秀衡卿如來の利益
莫大あり、と有難き思召し、仁安二年御堂を再建の思召有
し、同年四月八日、曉の御夢に如來告て曰、是より辰巳の方、小當て
鎌倉往還の中忍の位、小有縁の地有り、彼処へ送るなり、と告たまふ
故、草師尊像を御輿に乗せ、秀衡寵愛の牛、小引せ、家臣乗原五
郎秀時、小余りて送らせたまふ、八月八日、当山へ御止宿す、小不審お

於我其夜の中不彼牛遂不落余其志あり小住寺田慶并其有
土即其夜如來の御夢想を蒙り是れ有縁の地なりと示告あり西人
奇異の思を多し且靈夢の符合せし依て則茶原如來を当山
不安置一彼落命の牛は茶師堂の南に埋欠印不松の木を植置粟原
五郎八奥州へ立歸り秀衡一言上其後秀衡より本堂大塔庫利客殿
鐘樓山門仁王門以上七宇其外六ヶ寺を佛建立あり其砌彼牛の姿を
画せ送りきたり則当山の宝物なり但印の松も今の世も傳へ秀衡松
と云傳へ一旦茶原如來諸の痲難を救ひたす小舟へ參詣日こ小群參り諸
人尊崇せり其後年経て天平八年六月中石田治部少輔三成兵
火よりて本堂大塔を初として六坊まで残るに焼失せり此時の住寺
慶儀法印如來の尊像を出し地内一回火焼とあら然る不十二神

尊像ハ猛火をかきけて大樹の元へ移せ嚴然として立ふ小実小行
基菩薩の所作靈現著り一程慶長九年住寺永儀法印の代不至り

し

東照神君御鷹狩の前当山一御駕を入りさせり後茶原の由來住
寺小御尋有り一慶徃昔よりは因縁并兵火よりて七堂伽藍焼失
次第遂一申上奉りて敷則茶師御朱印被下置誠以利益の有難き
事奉り云べり此眼病の愁を救ふ信心の建感應河むと云ふ

東鑑曰秀衡得父讓繼絶真寔蒙將軍宣旨以
降官録越父祖榮輝及子弟亦送三十年卒去已
上三代九十九年之間所造立之堂塔不知幾千万宇云

○ 豹 形

通照院の裏手町家ありて此小持田村分也

駒形之神社同所より小右の宝殿より一奇術此の所を通り小
馬留りしと云ふ又義経とも云ふ孰れも古跡と云傳ふ

○与樂山光明寺 前谷村より遍照院より

不動尊立像 智證大師の作同画像筆者知る

増縁起曰柳当寺の不動尊は智證大師の御筆なり爰に傳来するは

往昔弘法大師遣唐使として渡海せむる時殊に不動尊を御信仰
有りて涉利運りし其後因縁の由法弟智證大師同じく入唐の
かまひ弘法大師御真筆の不動尊と金紙金泥の法花觀世音と智證
大師小送り目しれ御浴海のうへと御信心浅く凡時小大唐おとくし
厄病流行し人民おこし苦しむ時の帝より智證大師に此度の厄病
平愈の祈禱をたまふに宣旨に依て則彼不動尊を祈りたまふ

一七日の護摩八千枚執行せしむるに忽悪病平愈して貴勢歎ふ事

限りし平後帰朝の月して讚別寺多郡一寺を御建立有り是を明王山

智證寺と号し右不動尊觀世音法華經三品をたかき免勸行念ふ事

しるし西國一因悪疫流行し人民おこし苦しむ依て智證大師御真

筆の不動尊一筆三幅小写し弘法大師御真筆の不動尊に其后天正

年中に逮て兵亂を恐る大師御真筆の不動尊に国主一住寺に此二品

を守護して關東下りけり此時当国に悪疫夥しく流行し人民云に

かゆをん會歎ふ事あり平氣ふやれ爰に小不於て平愈の祈禱

致しと雖更に驗もかく諸民の歎き大方あり依て当村に於て時の

僧人民助の考とし彼不動の尊前におありし一七日執行御ける小不実小大

師の御真筆の利益著くして忽雲霧のをりく悪疫平愈けり

其後彼僧本國へ立歸んと思ひて右の二岳を拵ゆんとせしに不思義あり
不動尊ハ盤石のおとけありて持上得代又一夜を送りしに其夜夢告
ふて此より小堂を立安置せよとの出事しこれ奇異の思ひをありさ
ハ不動尊の心も叶はせり小堂場少やと早速此より一字を建立し安置
けり于時天正三乙亥年正月十六日此例に依り今の世まで正月七月十六日
を御縁日とし靈驗著しして參詣の輩願成就せんとしふりありき
病難を免りて身を済救願あり然も左少や他少厄病悪疾流行する
といへば此村に入りたり事ありきこれ遠近信仰の身曇晴を論せし
糸借絶る事あり

増 本倉稻荷大明神

鍾塚村入口右の方より此處に往古領主の御蔵
あり跡をみれば名もよきなりや近年利生ありて遠近より詣人あり金剛

吹上宿

増 熊谷鴻巣の間

水当社の多居の側より野州古武々原前鬼車人の法力に依り一夜小堀井と
し
も宿内二丁中程小忍への道あり一里餘あり

山王権現宿の鎮主系土生神とい例あり六月廿一日

吹上山勝龍寺

浄土宗鴻巣勝願寺末寺鎮谷山印し

山門

外金剛力士二玉也
安置あり長六尺

大淵山龍光寺

曹洞宗本尊地藏菩薩坐像
長一尺計行基菩薩
の作り

古碑寺内よりいふも古き物あり文字ありも漫滅して見えたり俗
癩病を煩ひし時の碑に祈れと忽ち更なるといふ

瑠理山一王寺真言新義大芦村より本尊薬師如来
長八寸計相像
作不知

むりし出羽國より廻國の修行者負来り此處に休し小篋小笈重くありて

上り此處に安置しける也

○大芦之渡口 荒川より川中狭し荒川の趣は川の向を八林又ハ八渡といふ

下小志

八王寺より日光への街道あり又大の川岸は江府より運送の船着あり

増按る小古へ鎌倉街乃今この村岡の渡口より往來せし趣なきも此渡

口も今の如く往來せし事も何となく成田記に成田一族會津へ下る途に

武蔵國荒川に着ければ流清くくしして瀬をせし石に極きて浪の

吹く遠近に浮ぶ群鳥の中は此鳥身ハ名さへゆりま忍の縁成年月の

任馴し城を遙く泳れ猶もおとしの弥増していふせし此小のうけん

ハ左門尉泰親の室

空海せこの身をいふは程は妙経川のゆるる浪を漕ぐに哉

斯口よりいひつる史より田面を色けれを云く畧

小崎池

祢ぬあまのくらしくも

あまのり

侍玉の山崎の池のいひも

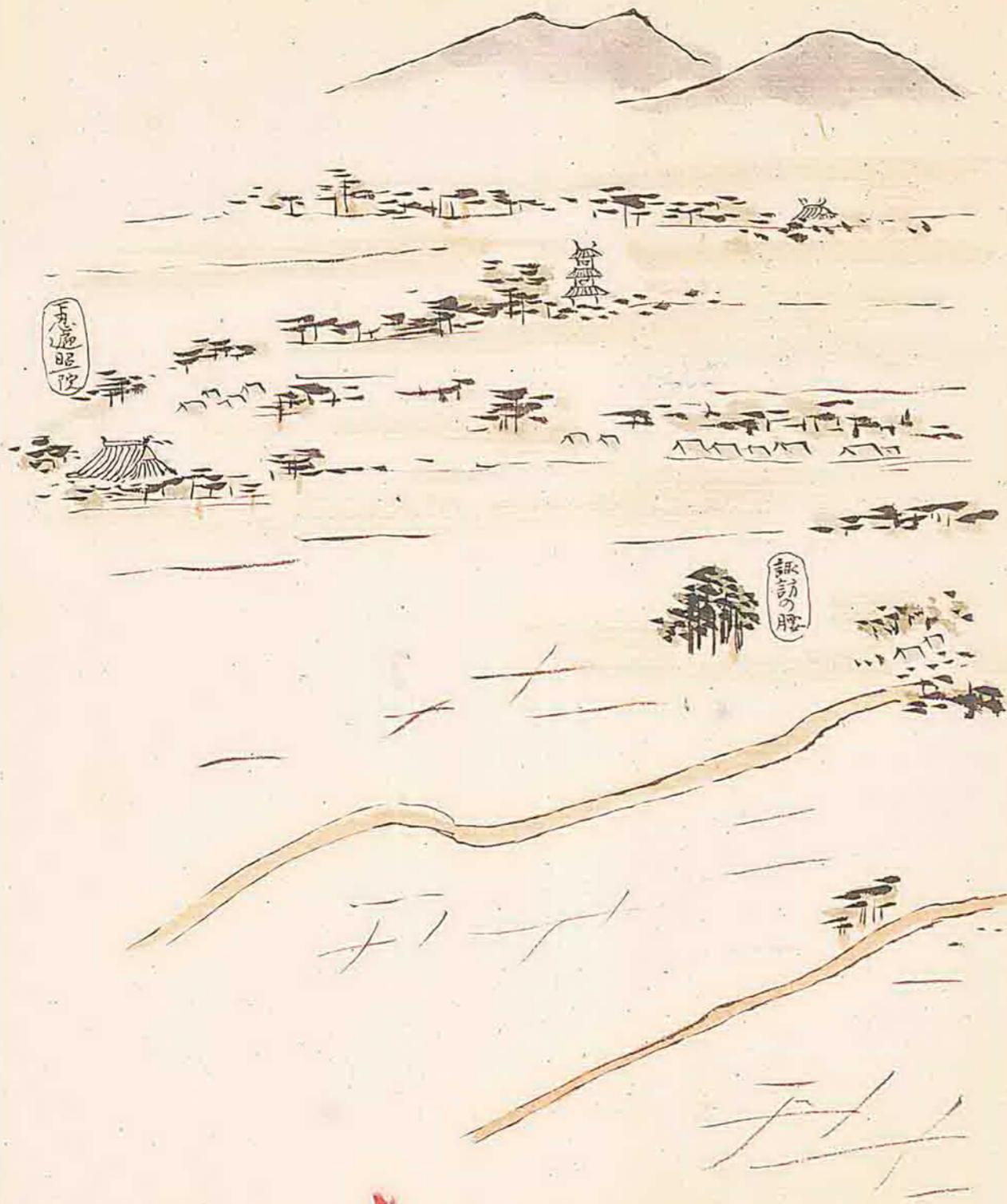
いひねい

手之陰

埼玉村

山崎のたぎりの
池の杜の月
さてや鏡丸
かやて
流じん
橋仲達

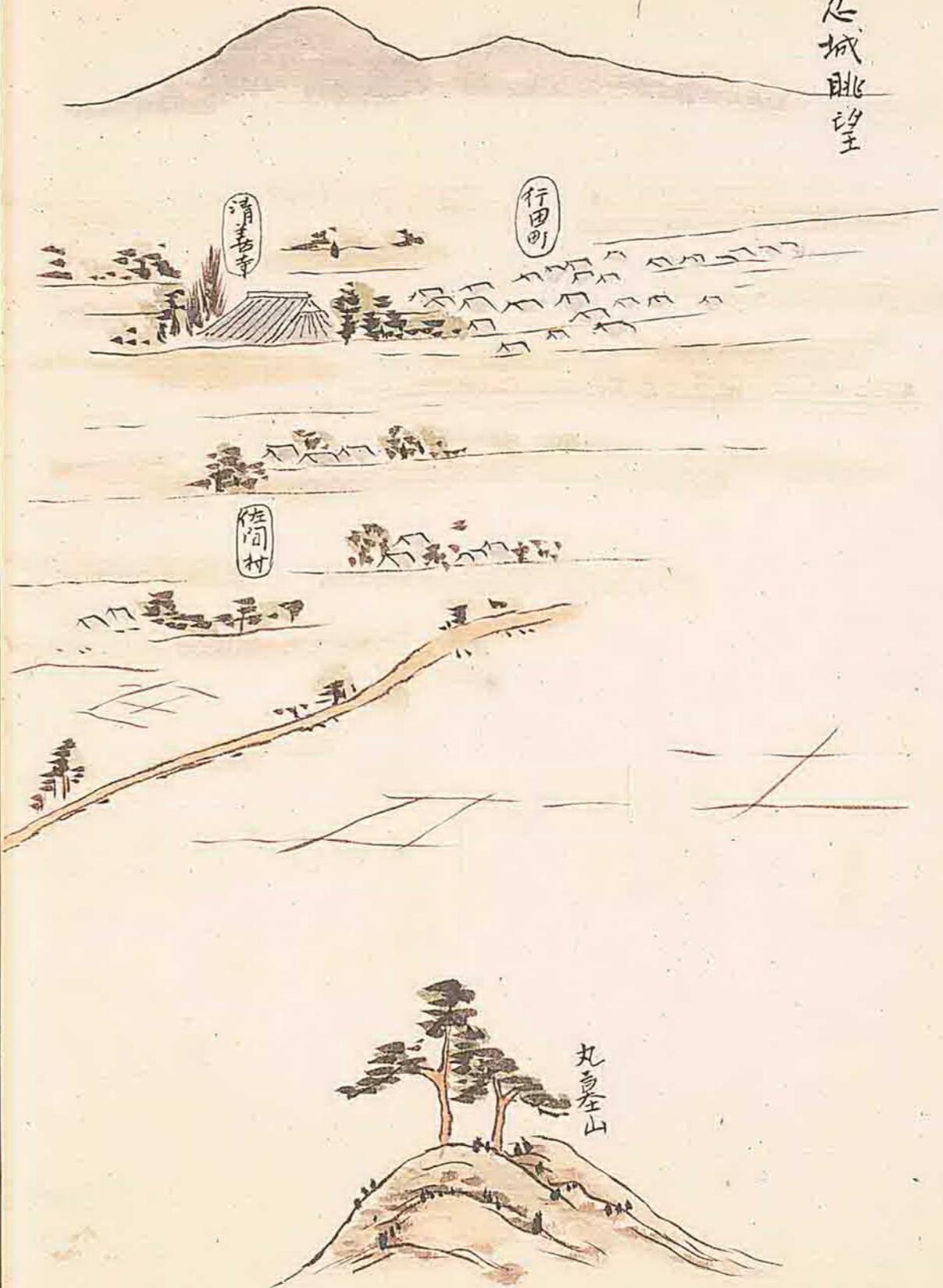




五層塔院

諏訪の腰

丸城眺望

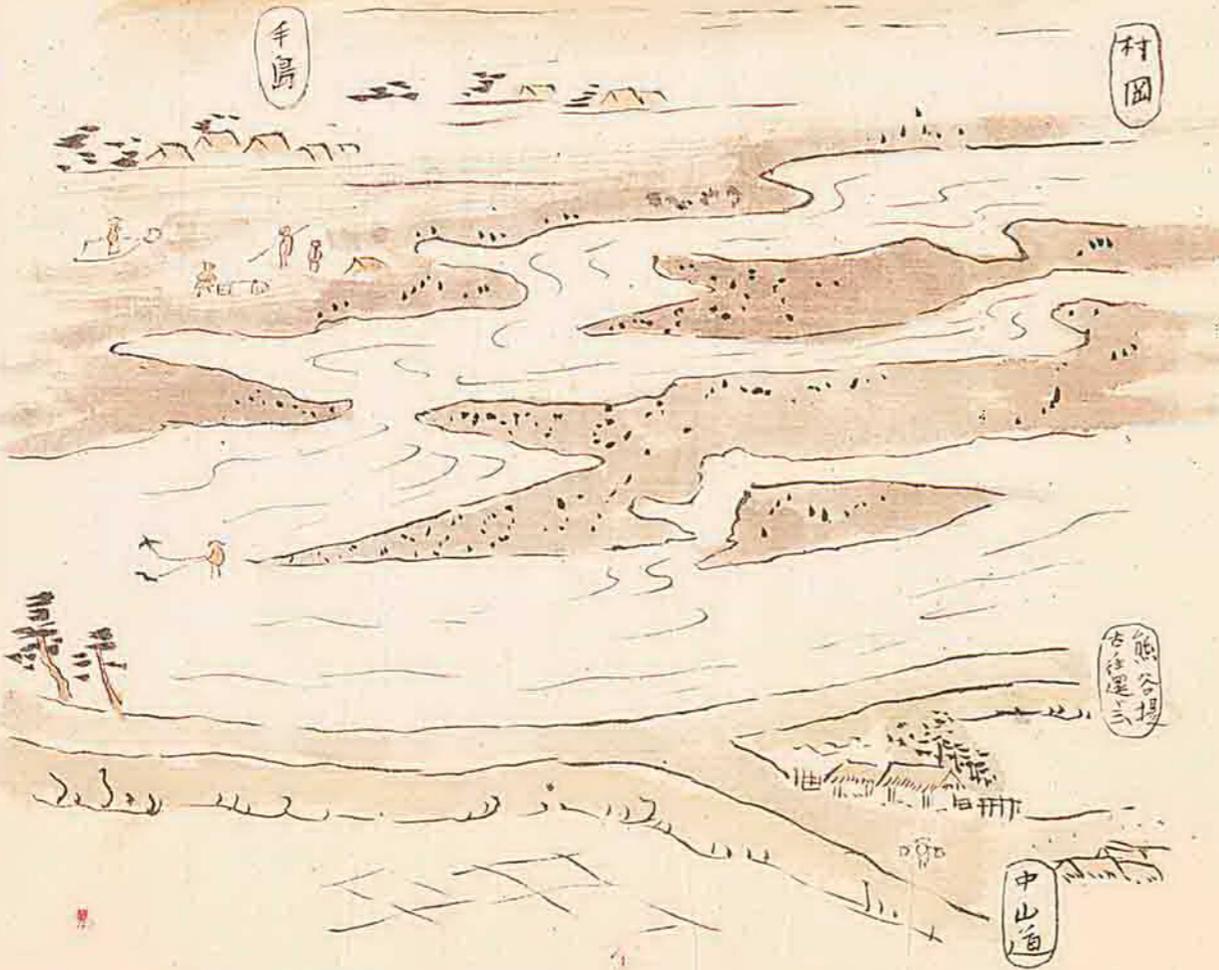


清善寺

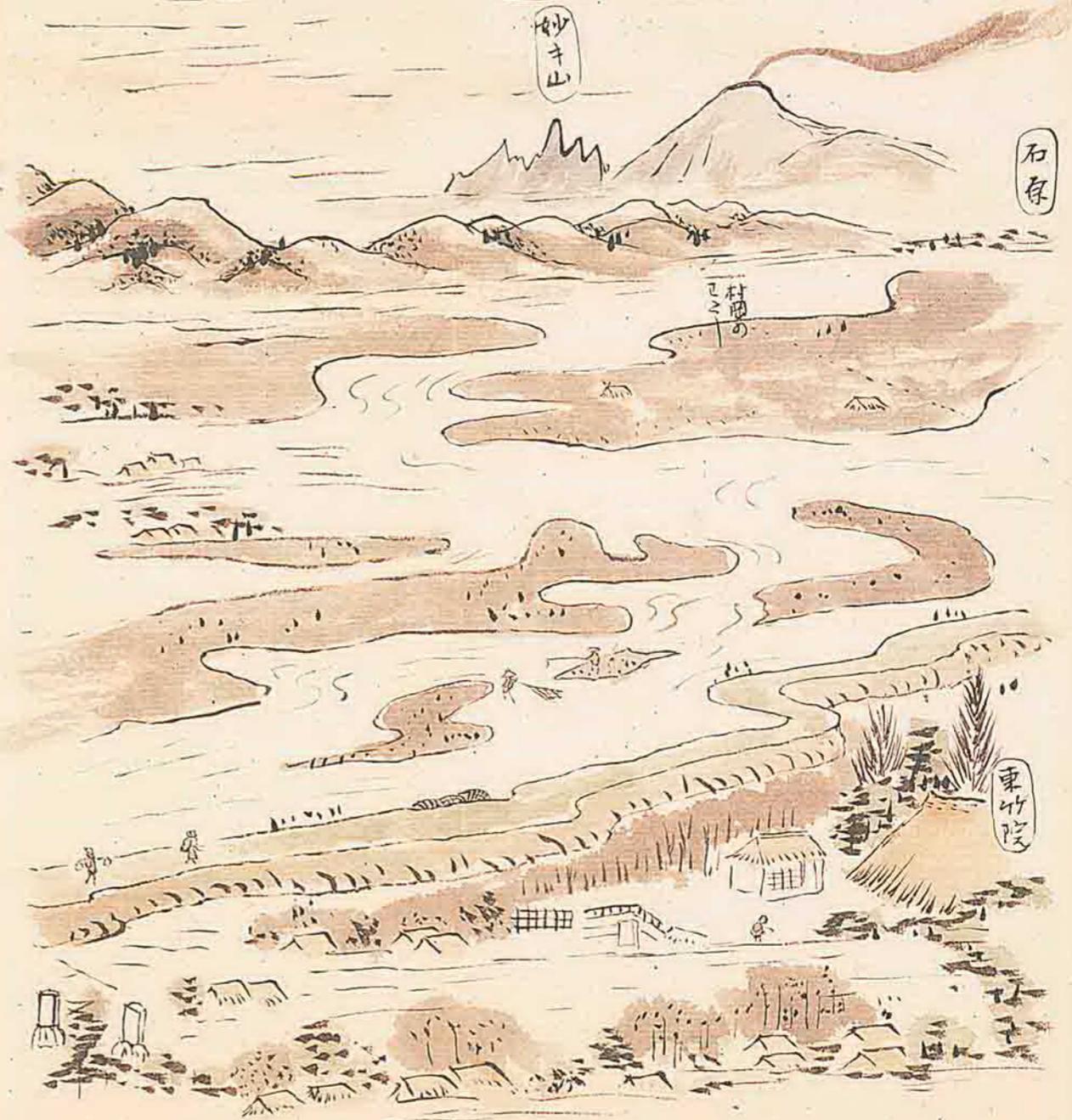
行田町

佐間村

丸島山



荒川



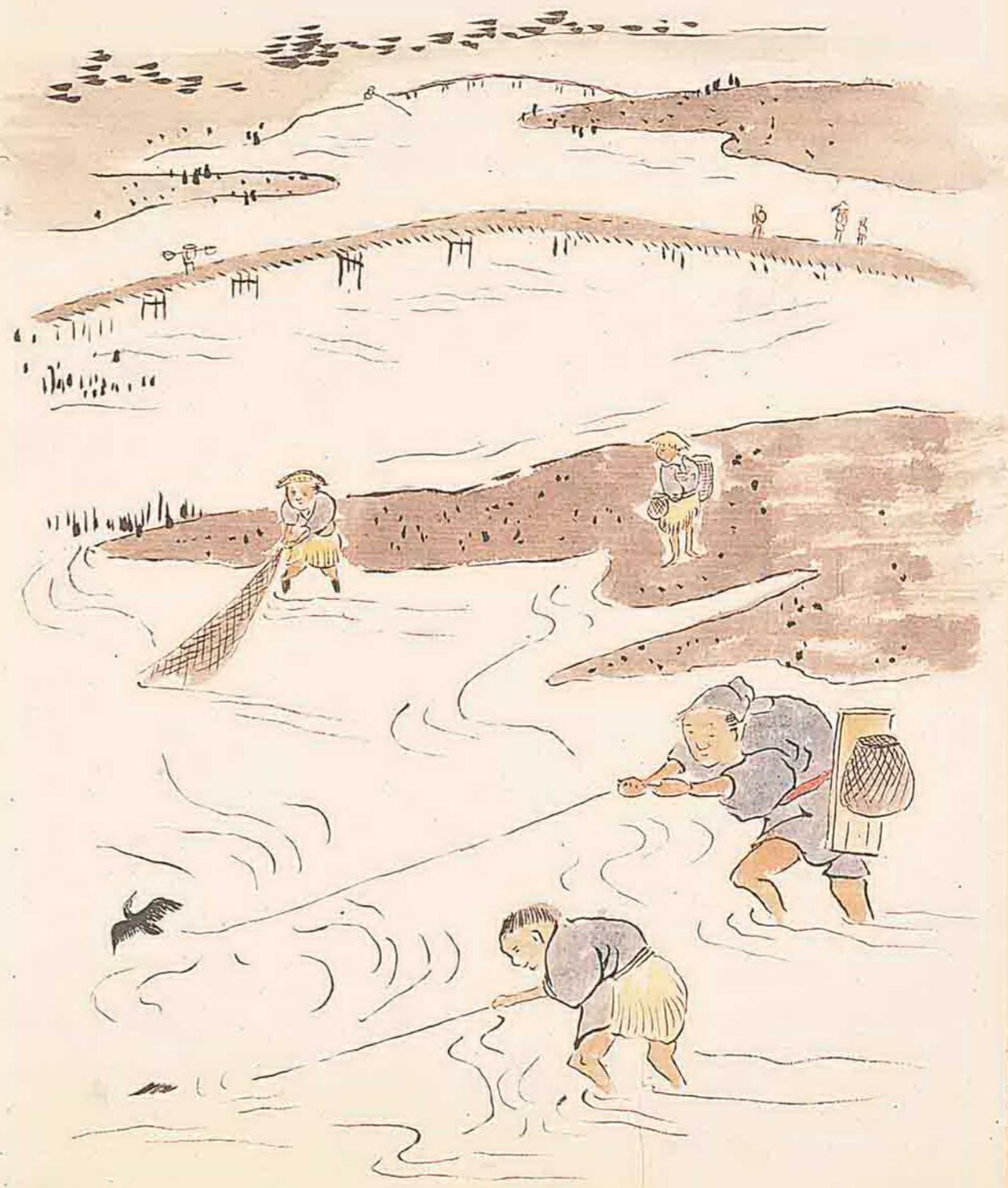


屋戸村



権八地蔵、遠くより石原村の
河原に四十程ある海原に
忍びり路程を里中武人乗りて
射藝炮術の遠矢ホセり俵馬
に尤幸甚の地と凡





増 入道ヶ淵

但還の右土手外より小舟池に芦生と形違、榎戸村の内し

相傳小住昔熊谷直実の馬取権太と云

因小住直実の馬
権を驪と云ふ見立

者の第権ニと

以者可強侠の死あり、後判髪して権入道と云り時、父下板戸

村より堤の、可くふ何して聊の論、事起後、被権ニ大

強の者お建、入、敵多く殺、其後此淵、身を投して失せと云り

故、名不呼と云

増

大井村 大井の竹と云、又大井四ヶ村と云、棚田門井新宿を加てし古

成田の臣大井若狭守、所領ありとし若狭守子孫、今棚田村あり

土民とあり、近き頃、其具を、持傳て、家を、倒し埋藏て

神の宮と崇え、惜む、今、鑑の、傳ふ、是、今、の、物、

う、古、煤、なる、也

○天満宮

棚田村真福寺 一車院未境 近年利生所々々あり

多して諸人多く俗棚田天神と称す例多し八月廿五日村の鎮守あり

○久下村

熊谷より吹上への間宿の形をみせり

増

此河よりハ市田庄久下より久下権守直光居住の地あり往還の南荒

川土手下に城跡と称する地あり旧館の跡といひ傳ふ漸星霜移たれば

瓦跡絶てありといひも源太屋舗ありい殿川棚田沼大沼杯之所あり

又三島大明神の社あり是館の鎮守ありしと云又直光の末市田太郎

といふ者も爰に住けりといひ依て市田庄といふもやたし有へり蓋旧館

の地ハ直光より連綿して住来り一地ハ直光と左郎の館とを混じり

去りて直光ハ鎌倉將軍の旗下たり一事ハ人能く知れりいれども

其終小至して詳し

東鑑曰直光者直実嫡母也就其好直実先年為直光代官

令勤仕京都大番之時武藏国傍輩等勤同役在洛此間各

以人々代官對直実現無礼直実為散其憤憤屬于新中

納言 知盛卿 送多年畢白地下向關東打節有石橋合戦為平

家戸人雖射源家其後又仕于源家於度々戰場抽勲功云云

而弃直光列新黃門家人之奈為宿意基日未及境違乱云云

又曰云云一谷合戦大將蒲冠者相從ノ輩安保次郎実光

中村小三郎時経河原太郎高直同次郎忠家小代八郎行平久下次

郎重光云云 按らに重光ハ直光の族あり人疑河原安保中村

等此の刃を交すの人あり尚よく考ふべし

成田記曰市田太郎長兼ハ右大將頼朝公の御家人久下権守直光ハ末葉

小一て代々久下小住より長兼の祖久下弥三郎兼行明應年中成田下
總守親泰小服せしり成田家の幕下となり父弥太郎基兼と
一度も変せざりしに依り成田長泰の誠心を感し娘を以て長兼
の妻とけり云々天正年中忍籠城の時持田口の生張小備ふと見たり
成田記持田口の出張持田口市田長兼を主将として横田近江を
五洲云々畧主将市田代久下山住し道も彼地の要害浅間を
敵を防不便ありと久下を捨て入城し此人は長妹智算ふて云々
縁者ある故云々畧

増 旧川久下村の裏に流る、小川を以て古荒川此所を流るといふ今も民
家の屋敷杯を堀出さるく小石あり川下に綾瀬川といふ隅田川に流る
増 火とも堤 古川の手前爰に小石あり小石寺を以て是古の荒川堤成

豊一 天正年中忍城一攻来し石田の黨此爰にて日暮り挑灯松明
を燈し所ありと云

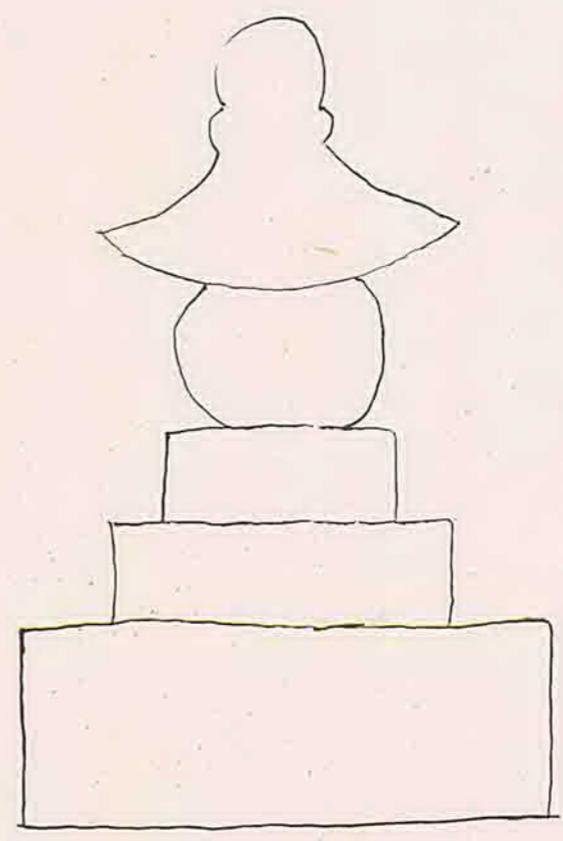
増 地藏堂 往還の西をつれ堤の上安置凡相傳ふ悪童平井権
八郎上州の結商人を殺害し立退し此あり利し故に里俗権八地藏
と云と也又東竹院裏の堤小あり地藏しと云り按る小是く孫と東
竹院の方何しは古の往還ありて人家稀なり処あり熊谷堤とい
旅人夜行を恐れしとりの芭蕉翁う句ふ

堤名一 日七 鐘ハ熊谷寺 見え哉
去の日のいと長ふ夕暮の鐘なと守ゆるに程路たりに
古のさまおもひ忍ふ小足連判

○ 梅龍山東竹院禪洞家龍淵寺末御朱印寺領三十石 惣門 横額洞上法
鹿月丹書

山門 樓上十一面
觀音九女置 鐘樓 寺内左手
小所 禪堂 右手小
可

直光之墓 本堂の後小可



上松家女子之墓 同處小可 五輪の塔に文字見へん深谷上松家此娘なりのい云傳ふ

当寺に建久七年權守直光の開基あり中興永録年中深谷の城主

上松名不知 再建せり 其後寛永年中焼失して後今のとくに堂塔再三建立せりといふ

○荒川 一面小石の川原あり水幾筋よも流れ疾き夏の水まで鮎ひきうり美景のよあり

増 荒川は忍より一里程し水源秩父三峯山をひ中津川より出て下戸田川を經て佃の海に落る此川水清りりにして初夏の頃より鮎身を

鵜飼簀瀨張投網杯くもくの仕業もて漁に鮎鱒等も稀を得る事あり鰻又多し今東都の市中は荒川大蒲焼と稱して彌常く物ハ荒川の物味ときを賞むれはあり

増 鰻 本朝食鑑曰云く江東亦稱美者多江都芝之漁市所彌常者玉川之産而最大其味極佳深川之産美者多

其餘利根箕輪田中荒川之産味絶勝者不少云云
之下の茶肆にて鱈鮓を製して彌南く名産小等し
左あつ川の瀬小多に鮎の腸をれ、せれをうるくと、下へりり老女
秋さひの鮎の腸をやらかたと、すし小まをち、母孫の母 西行
此二首、秩父風土記築深瀬村の条小載たり、同書註に村名を築を
打く、今不忍市鎮分川辺小築代といふ可なり云々
此記を見れば、ひり事も多し、証とまら不足り、以老女歌、和漢
三文國會のせりり

増補忍名所國會卷之一終

増補忍名所國會卷之二

洞李 香 齋著
岩崎 長容 増補

城北之方

○妙法山蓮華寺 法花宗池上本門寺末 本尊三空尊

日蓮大菩薩 木像長二尺計 日法上人作 本堂横額妙法山筆者陳元啓 正統梅峰

堂敬書 増 按るに元啓、明末の人にして我朝 の頃舜水と共小

明朝の乱を避て歸化せり人なり 後尾州に任に深草の元政上人と親
しく常小詩を以て唱酬せりといふ

鬼子母神堂 本堂の前右小あり 長八寸計 傳教大師作 三十番神堂本堂の

前左手小あり 古碑南無日朗菩薩とあり 裏小元應二庚申正月廿日と有

今酉年と五百四年にあり 酉年、洞李香母の 日朗上人真筆の碑門内左手

にあり大黒天 日蓮上人の作あり

○略縁記曰夫当山開基日朗菩薩なり 当寺往昔は真言宗にして
同国埼玉郡小見村ありて既ち数百年たりたりしに文永年中
日朗菩薩佐渡へ旅行の時黄昏小達人て頻りに宿を乞ふに僧を
難儀して寺内へ招き暫道路の風行を 諸僧も小宿善也催しん
終ち佛法之大儀顯密二教の論ふがはひ教へ問答小至し終ち法花經
二級伏し此地を以て日朗菩薩小舎して永く法花靈場を建ふんや
と申しに日朗ゆりて歡ひむし則時小妙法山蓮花寺と改られ天下安
全国家豊饒二世満願の爲の靈場とを多しぬ百余年を経て忍城主
成田何某城の鬼門小舎して一乘妙典の精舎を建祈願所と名せんと

あたより折る幸々かて此寺を以中興元電の以行程を里あり
を経る忍領谷郷へ引移りたまひ永く國家鎮護の精舎とあり
ありあり

○谷郷村 谷郷の谷より里俗谷の谷より

○春日大明神 谷々村畑の中森の内より和州奈良より迂り

といふ年月詳なり此村及び行田町の出生神といふ

例多し日不定 別当 山定院 僧驗

○増 古くを奈良より神使の鹿来りし小舎の時土人は是れを打殺しけられ
其人狂亂して死せりと我々我々其のむかひたえて来るるありと
里俗小傳ふ又此村中小芋頭を植ふ事を禁は極れ必宗
ありといふ当社小ありての由縁ありなりとも委ふを

○増 成田記曰当社、藤原氏の祖神なり、成田家代々崇奉あり、中略
 天正十五丁亥年の春成田氏長当社に参詣して武運長久を祈願、
 し拜殿におかみ、奉納の連歌具行一氏長が句、此れ、随従の連
 歌師園生随傳小姓桂千菊横池虎一提筆千代杯各連歌小加ゆ云
 其後句一二を志す

むらへ頼雲の花をく神の春

氏長

さえふふ月ふ朱の玉垣

随傳

たけふ小柳葉うたふ夢ハハ

千菊

とものふふふ小袖のうん

虎一

立ちふる都のりくや近うし

笹千代

道の行神、奉納はこれなり

国松

りた、あまのり、あけけり、霞事

能長

春をたふる雨のまのり

虎次

○行田山明王院

山伏同村入口右手小河、不動尊

智證大師画眼二童子
 智光大師筆

身代不動といふ不動堂核額行田山、阿部正職侯の筆也

○増 当院不動尊園城寺什宝二幅の其一幅なりといふ相傳ふむ

成田下総守

知不

園城寺小暫在り、又河、後園東下り、時是を

得て来り、その後当院へ預布むふしと古、行田新所今の法性寺前

河、小河、寛永年中爰小轉を開祖、阿彦利宗貞と云治

美三巳年八月八日遷化

○増 駒形大明神

同村の西倚字、二ッ家といふ小河、お傳ふ

むり、血尾村雷電宮へ右大将頼朝師より奉幣の為小梶原

景時来り——時馬より下りて憩し憩し神体ハ駒の頭を置至
し古雅なる物し尤木として刺る所のし

増

梶塚大権現

駒形社の東畑の中ハ何ハ寛政年中ハ石碑を

建る梶塚大権現と鐫む此迄却て梶塚といふ梶原四尾雷電

ハありて其時馬を繫し一處しといふ近き頃迄ハ碑ハかゝる名のし

ありしハ里人等此處を馬に乗りて通り或ハ誤て不浄の類を

かゝるハ忽凶阿るに依て今の如く碑を建瑞垣を結て崇祭を

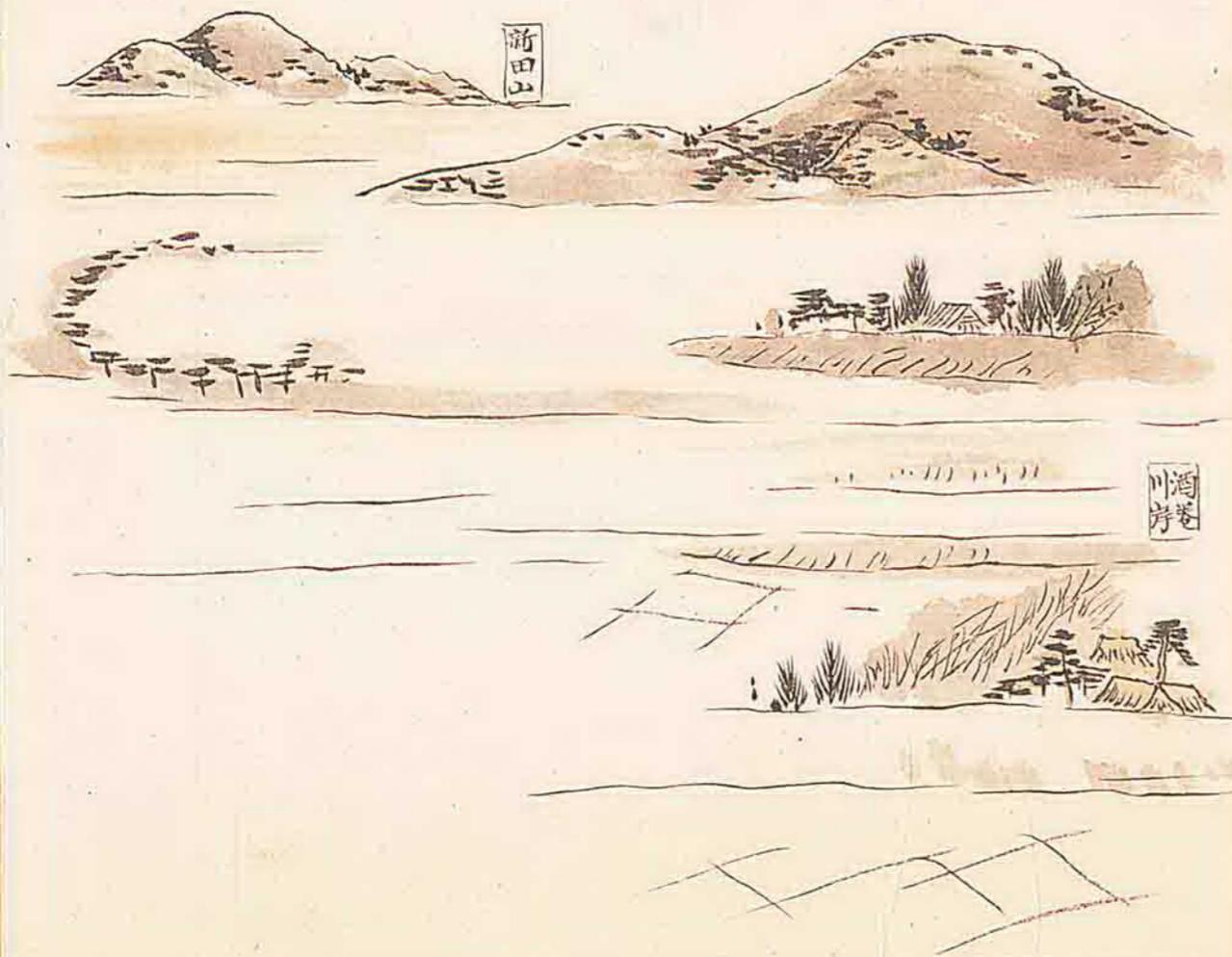
とせ此村の内昔鶴ヶ岳の宮寺領といふ——事東鑑不見之なり

今其地いハ目しありと云ふに

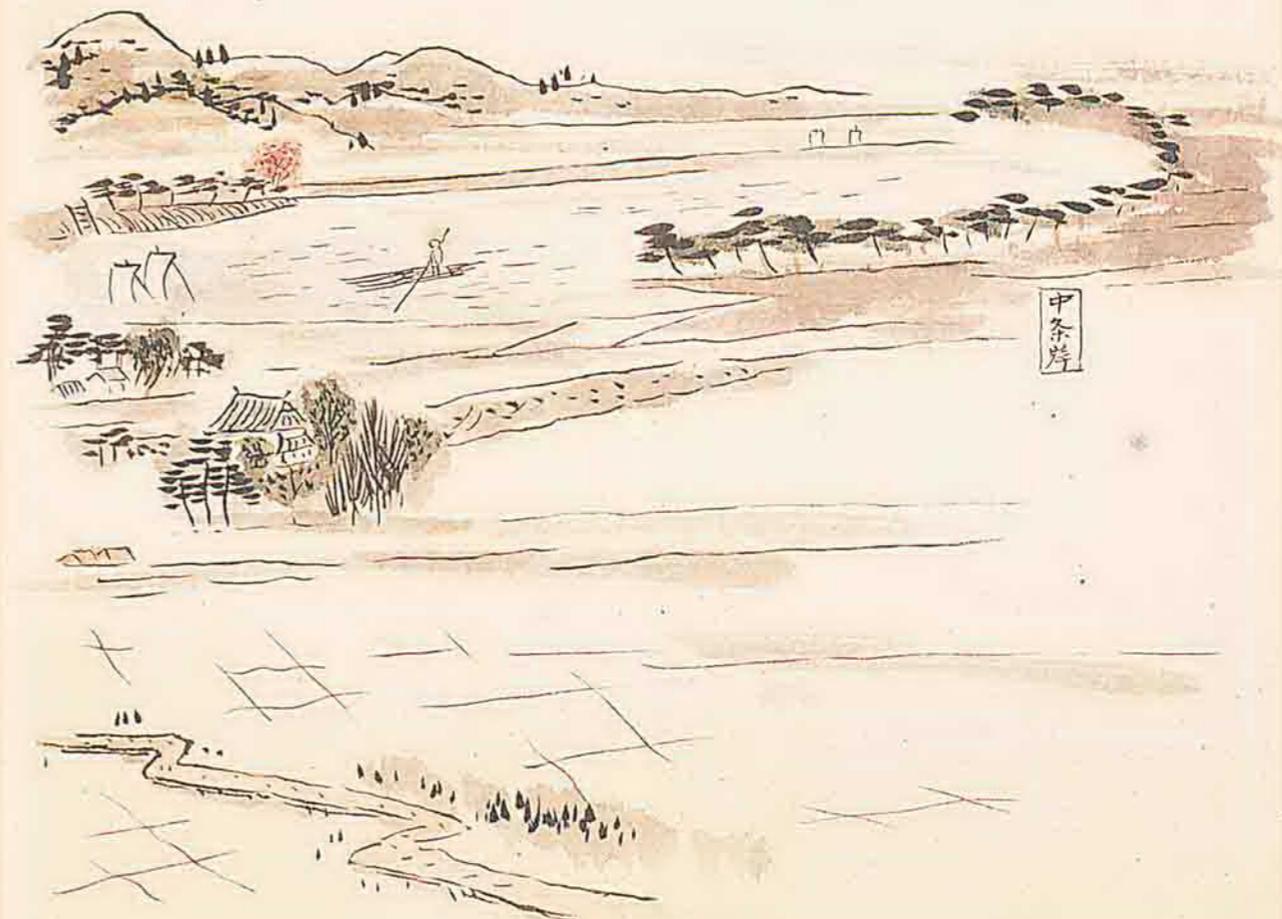
東鑑曰寛元五年七月十六日大納言法印補鶴

岳ノ別当職之後今日始有拜賀又宮寺領武

新田山
 浮雲
 夕立
 利根の川
 上湯
 真淵



刀箱川





其二

刀祢の川原

新初

母の袖丁

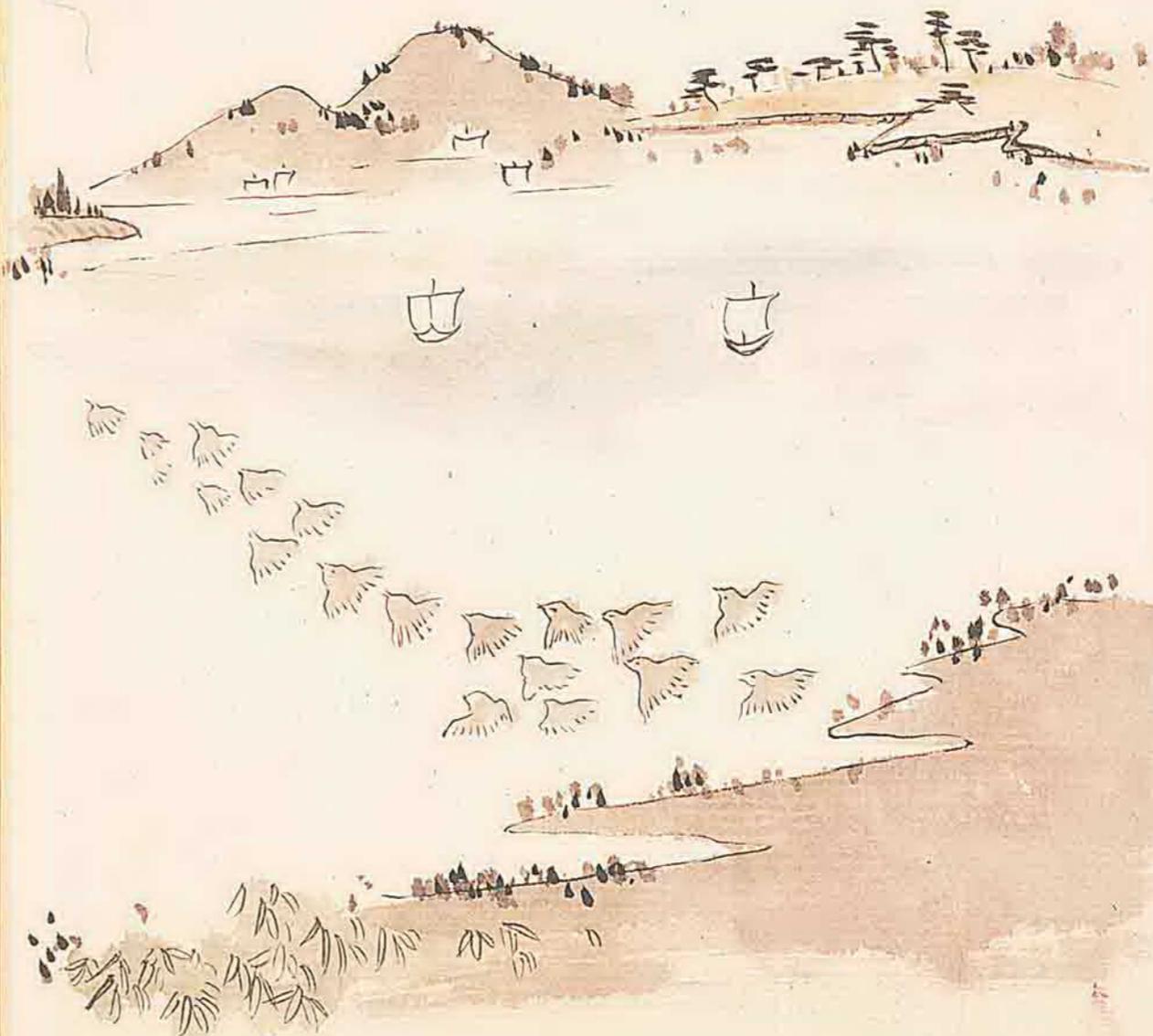
甲の

刀祢川の

石の跡

川原

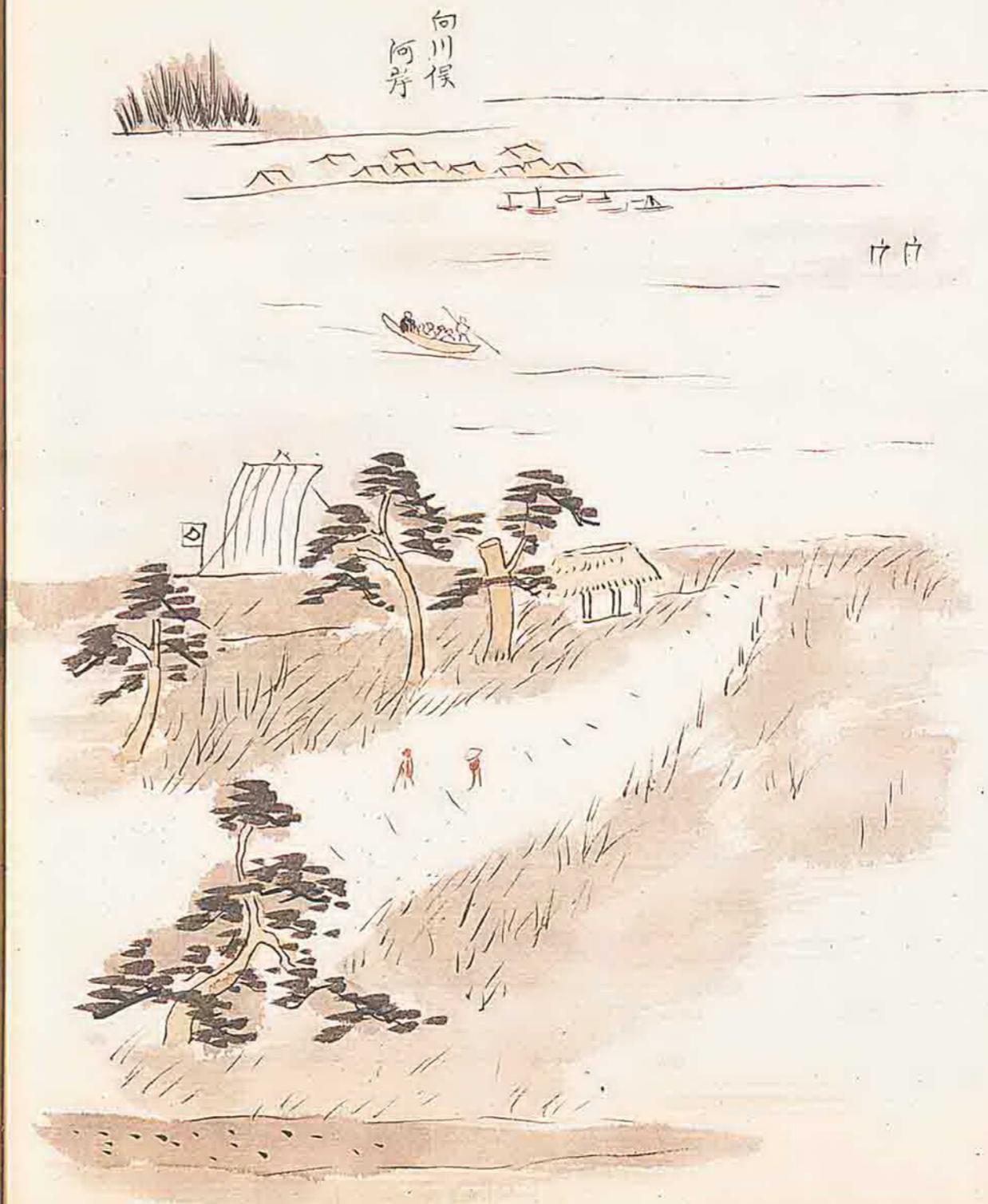
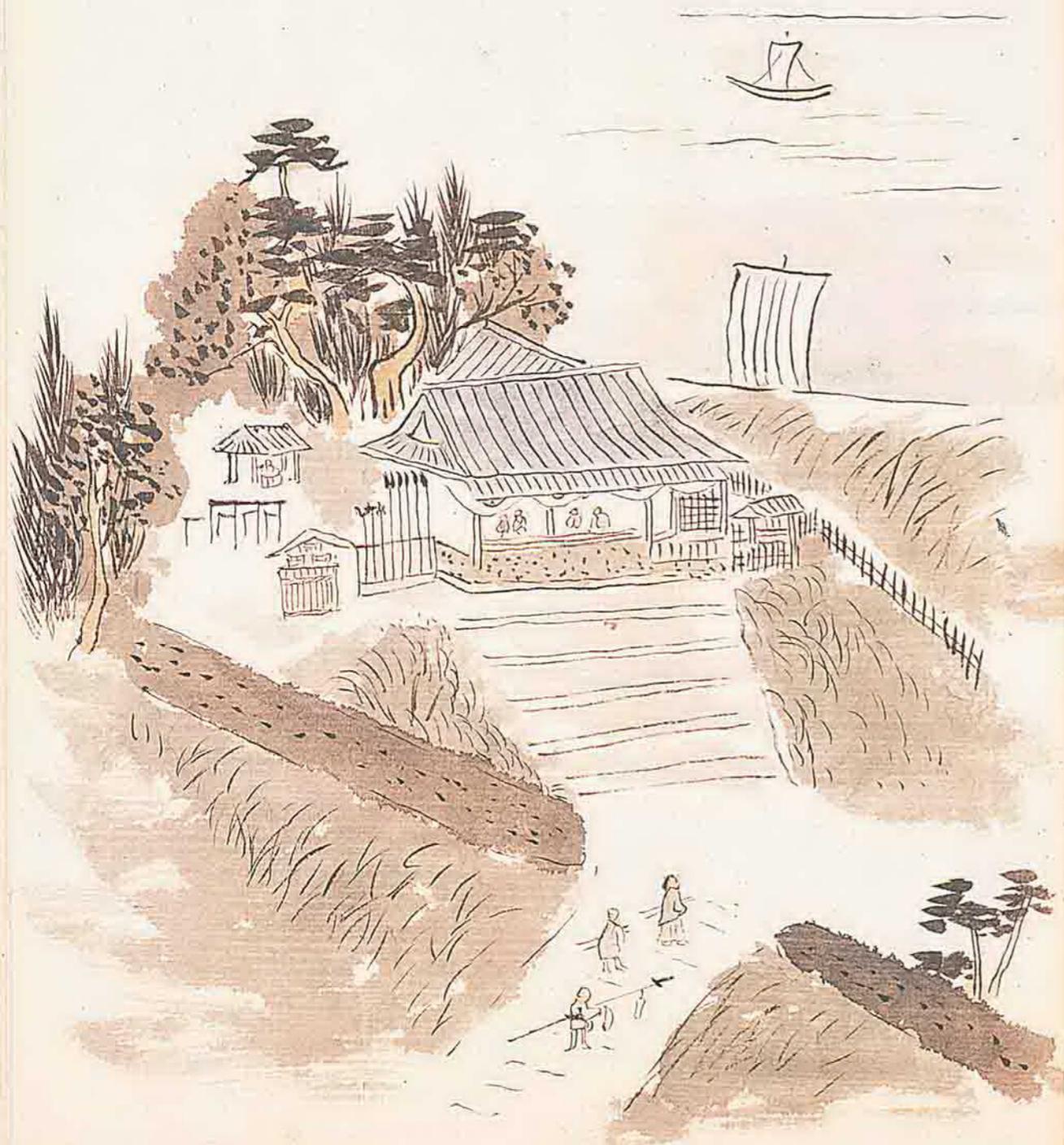
と



新々
川俣町關所

向川俣
阿岸

竹竹



小見村觀音
岩窟之圖



風國矢古宇郷ノ内以別当得分为御續経料所被
始置不断大般若経轉讀ト云ク

増 利根川 又稱乃稱川坂東左郎といふ坂東第一の大河なり酒巻

及び中條の河より少く川幅十丁余七河あり一季春より首
夏の頃迄水涼の雪解少く水増速利

増 利根川産物 鯉 鱸 鮎 鬼 鱒 鮭 鰻

本朝食鑑曰云々凡東北大河米之本朝式丹波丹後
若狭越前但馬因幡貢生鮭今越後越中飛騨陸
奥出羽常之水戸秋田最多然之銚子下野州之中
川上野州之利根亦有夏末云云

鰻

目書曰云云淺草川之産美者多其餘利根箕輪
田中川荒川之産味絶勝者不少云云

○增 百川朝宗曰利根川、上州利根より流北出て多くの川、落合

と川路二千八里余お流る栗橋御所前より二口お流れ一ツは

南の方権現堂川といふ江戸へ落合一ツは栗橋宿より東の方流

赤堀川といふ川下、下利根川とお唱東海御子口へ落申儀

万葉集

刀稱河泊乃可波世毛思良受多和多里奈美

爾安布能須安敵流伎美可母

六帖

利根川の上、濁りて下澄てあるにをのぶと君控恨

新勅 世分ハ袖ハ花ハぬめと利川の石ハぬむともいさ川有り

○阿弥陀堂 利根川堤下須賀村より別当小笠原如來堂

東都上野御末 本尊阿弥陀如來長一尺二寸作志らる

○此阿弥陀佛ハ当村百姓手右高と云へる者の庭中ハ雪外れも積ら

ざる所有り只折々光明を放つ事あり掘見口ハ此如來を出せり

依り領主ハ誨へるに則如來を 取上たむし七島ハ包み江戸をい

炭の屋舗廐の二階揚置に又光明を放ちあふ事あり然るハ

桂昌院殿御聴小達上野御坊の成り於て堂宇を所建立所りて

安置し玉ひやり時ハ 桂昌院殿御眼を頼む也たむし寸間も見え

よきより医療尤急かると之も験ふく爰ハ薩州の藩医田宮山

なり者有り類ハ眼科練熟の医ありけり種々手を尽すと云へ

類験しやいさ様ハ詮方少くや思召人日比念一たまふ此如來を

旦夕只脚一心小念一たまひ一お納更まりくせん或夜御枕の元お立

て元出現の地忍の須賀村一安置せし所不例市平愈々人と御告りて
見たりて御夢覺むと思ふ事亦有りて思ふ事早達此地
へ遣はる夫よりたれも市平愈々し不依て此れより少く若干田
地を寄附しむ此時彼医一山と九夫の力及ぶ程を感し且如表の
利益著きせ信仰して其職を退して爰に未だ任り則蒼の用
山是より後不爰に寂に

増 因ふ江府上野信濃坂とふ本亦如未ありし如表又善

光寺と同体あり依て志すしと此中あり

佛龕 桂昌院殿の市寄進

額 無量壽堂 阿部正識炭之筆

司 阿弥院堂 薩摩守中将吉貴炭之寄附

琉球中山王之索書大清福州鼓山沙門大心禪師真蹟

為一三九八

阿弥院堂

横額

横六尺余 堅三尺半
地金 文字紺青入

増 須賀修理亮恭隆旧館之趾 荒木村より須加村内へ入る路の右

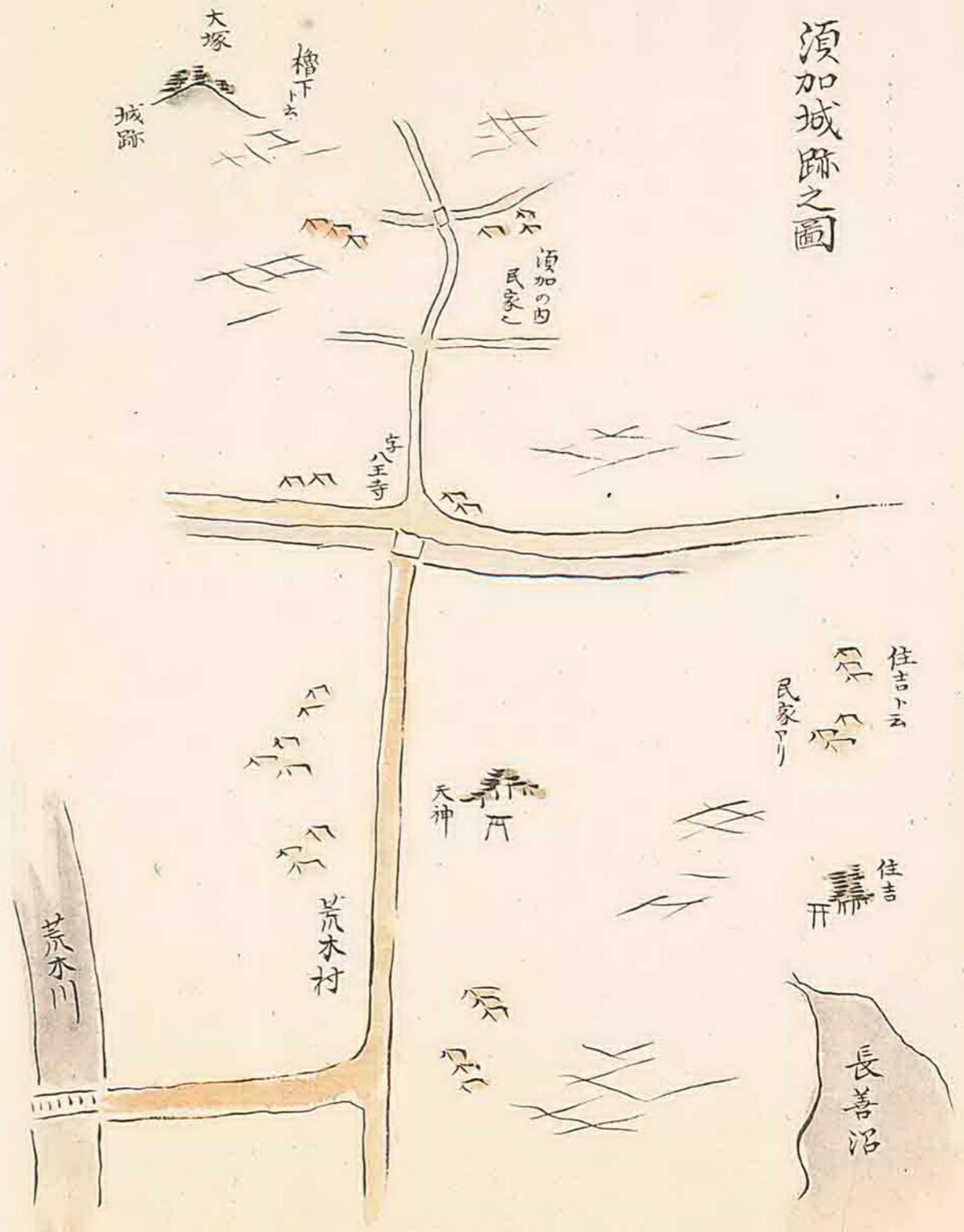
手小河より大塚槽下杯の名のし猶りて所取ハ絶てあり田疇とあり
須加恭隆・成田氏長の姉御に代り成田家小属せり天正九年の

籠城ハコ城シロ九ノ河ノ一門ノ列シ居ル

成田記赤井勝元思意を回ししもの城を責落しものふらば
其余の城も手を下りて降参し小武藏を掌握せん事安しと
軍勢五千余騎を相催し天文五年八月上武の境利根川を押渡り
住吉の南小陣地居し忍の城を攻んと成田長泰此事をすより
居るを敵を引受るにけり城より一里余押出し荒木川を
前不当其橋を引落し小箕の堤を楯とし敵川より上りて中途を
討んと待掛ける折あり森雨ふり水タり渡り難くや有らん於豫
して居るを爰も成田の旗下須賀出雲守隆宗も兼て須加の城に
在りしが所々の兵士五百余人を引率して赤井の陣の裏手へ廻り旗
旗を凡そ翻し整しと押掛れ敵の軍兵此勢いふや呑れけん

白石豊前守の二備忽ち崩れ立川を渡りて返歸し軍中一度
動揺し数千の兵士聞定しか多散りし乱れ東西に走り或は利根
川を渡りし河の須加の軍兵勝に乗て追討し首三十余級を取
勝時を揚て歸り大將赤井のありくと敗兵を引纏え元の陣より
遥に隔北に穿し陣をゆるう今日須加の兵不見怖して是
苦む敗せしを深く憤りて夜残兵を引具し須加の城へ押寄三方
より火を放ち無二無三責立し元末浅間の要害をて勢に少
殊ふ今日大敗の事ありて夜討りありしと思し依り油断して
ありし由へ城中防上便り地失ひ終に堪難く出雲守をもち兵
卒城を外れ出成田の陣に加りしなり云

須加城跡之圖



○中条川岸 利根川堤下中条村の西なり 東海舟の廻船問屋あり

○酒巻川岸 右におり酒巻村あり

○増 勝呂大明神 南河原村民家の東にあり 川原太郎高直の造立と云

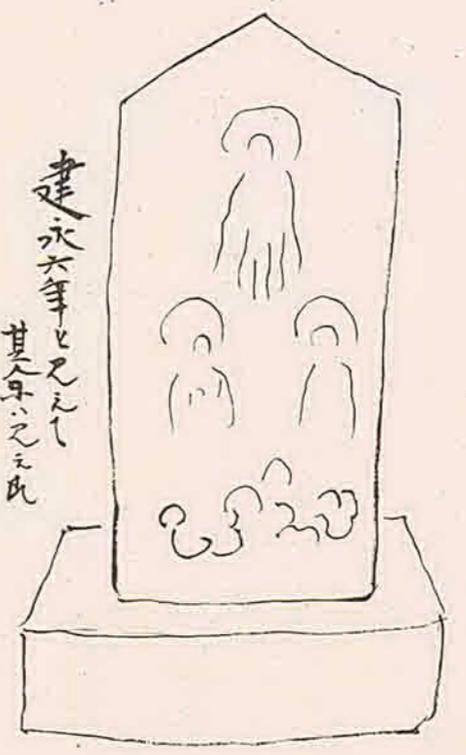
高直揚州より出一人少く往古の神を信仰し此地より来りて後川
越領勝呂村の住吉を爰は移り依り勝呂の神といふと云へり社領

御朱印四石五斗 別当本堂院修験

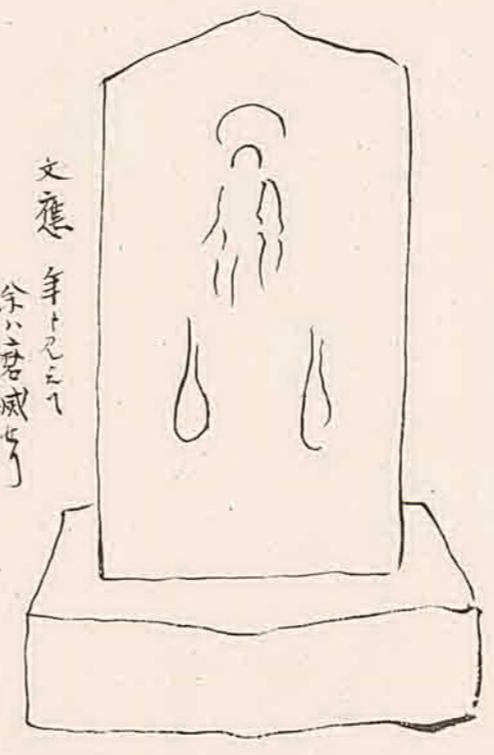
○増 真南院観福寺 古事村言一条院寺川原太郎高直の草創と

云ふ御朱印四石八斗高直兄弟之墓碑本堂の後より

次郎高直之墓



次郎忠家之墓



増 今村佐渡守重光之墓右同所あり

碑面 蓮東院恭翁道壽居士

旧塔再建堂

天正十九年八月十七日河原姓今村佐渡守重光

増 長門本曰上畧濱の大手より蒲生冠者範頼大將軍より五万騎して

押寄たり我れしくと先陣北心を以兵多くなり以中武藏国私

黨小河原太郎高直同次郎盛直兄弟二人馳来て馬より下り生田

の森の城居 攻寄して居ぬき逆発木を乗越して城の中へ入るを城中

より備中国任人真鍋四郎として有るより四郎ハ二谷小道丸なり其助

先究竟の弓の上手精兵の手よりなり其木戸口小置道進なり其

河原太郎の乗越るを見て是のめりより以て射し其河原

太郎より弓手の草摺のを射し其膝をくじり杖よりなり其立

此の如き弟小次郎門と寄て兄を肩よりけ帰る所を 助光又よみ
 びて二の矢を射たりやる小次郎妻手の膝の節を何とにせられ
 兄と一枕をよむれ 小次郎云々 重光ハ太郎高直の末葉ホして
 成田家子属ハ天正の役小籠城して軍功ありといへり 軍記ホ下
所見カ 子孫
 於尚村に散在して民間に下る 今村河原太郎左工門といへり 司所
 入ノ川原高直舊所と記し石標あり

増 高直 旧館之趾

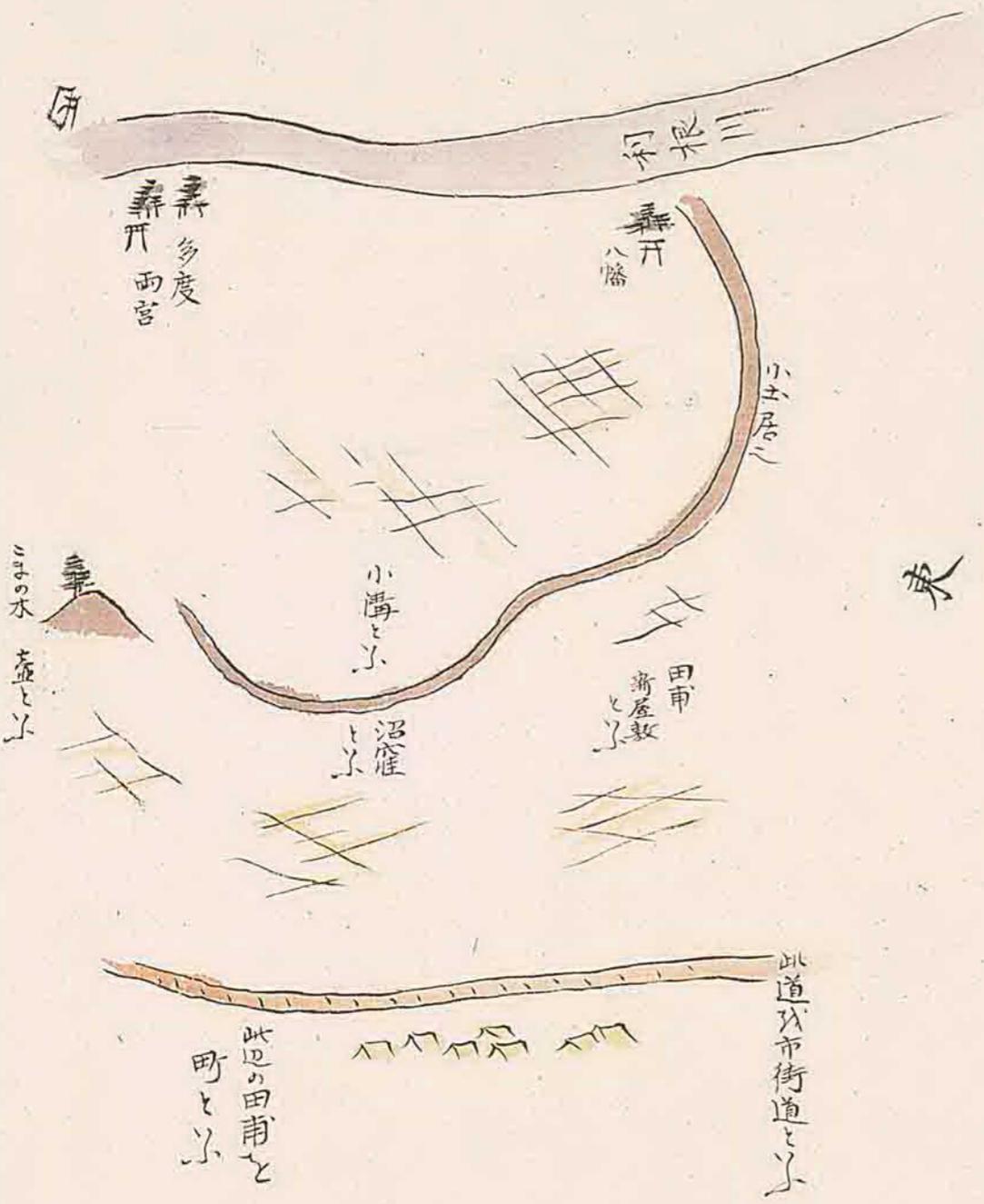
同村北裏の方より 埋沼の面より聊残

りて昔は忍ふに堪えたり 疑ふに重光の
旧館云々

増 多度両社

利根川内堤の側より 文政年中北伊勢より

君侯に置かざる靈驗著き事近国に亘り



増神護山淨泉寺

洞家竟洲寺末下河上村川の辺にあり寺領

卯朱印二十石本尊阿弥陀如来

屋像壹尺許
化去しに

縁起曰押当寺は往古何の帝宮何人の開闢といふ事なきに保延

六年に建立の門存在して今七百年も及ぶありて其れより中古熊野

権現に岳跡あり竟洲三世祖儒和尚を招いて開祖といふ又当寺

開基本無上杉居士開基不識院真光謙信大阿闍梨法印と云

と牌堂内より其境地の前は星川の流清く後山林を林として

中小本堂山門廻廊鐘樓寮舎坊舎備らるる形一畝に至りて

慶長九甲辰年十月

東照神君より卯朱印二十石を賜り代々お鎮り奉りける靈場也

と也天保三年上州邑樂郡五ヶ村の田島氏より弥陀の尊像を安

奉納此の尊像は東武何某侯に勤仕の以主君の持佛ありし也

給り歸村して家の持佛として有しり代々故障ありて漸く其の

無是非其邑の堂へ告げ納むるなり又其氏族へ崇り程々の病難

あり爰に不思議也其家主へ夢の告げり我々是より南西に衆生

結縁の地なり是に移住せよとの夢想あり此何と云ふ事よ再び

告給ふに依り其氏族へ五ヶ事あるを語りゆるに南西あり我隣村

下川上淨泉寺ありし中江袋の何某語り此の皆一同に是

に依り則ち當寺へ還へ本尊の前へ安置し奉けるに日し感應靈驗

著して近軍遠境歩むを運び群を形に誠心念佛衆生接取

不捨の端あり益日盛んし其れ群集して門前より市をたけ何ん

此前縁を説稱功績の由來後事不朽の日時を傳へ永く山門の記とせん

四天门 外四天王を安置に 惣門 保延六年の棟札あり 鐘楼 四天门の東あり

熊野権現 寺の東森の中あり 当寺の鎮守し

熊野縁起曰一夜雷電暴雨俄に起て堂上に震ふ雲中小神あり

白衣よりて我たる冠を著從者ありて云 惟道 当山開祖の桂儒和尚

よ来て我は是紀州熊野権現あり久敷和尚の道風を聞て護法

の為殊に爰よ来りて寺境の東よ安坐にへて告給ふ師歎ふる恨

みく此事師不見て他人見るあり是より号て神護山とよ遂に

神の指揮為給ふ所へ神祠を造營に師は永正十六己丑年十月七日

遷寂に

○藍澤明王

むの西倚あり

増補忍名所圖會卷之二終

忍名所圖會卷之二終



四天门 外四天王を安置に 惣門 保延六年の棟札あり 鐘楼 四天門の東あり

熊野権現 寺の東森の中あり 当寺の鎮守し

熊野縁起曰一夜雷電暴雨俄不起て堂上に震ふ雲中小神あり

白衣よりて我たる冠を著從者ありて 惟道 当山開祖の前桂儒和尚

ふ来て我は是純州熊野権現あり 久敷和尚の道凡九削て護法

の為殊小爰ふ来れり 寺境の東ふ安坐にへりと告給ふ師歎ふる恨

みく此事師不見て他人見るあり 是より号て神護山とふ遂ふ

神の指揮為給ふ所へ神祠を造営に 師々永正十六年十月七日

遷寂に

○藍淨明王

此の西倚あり

増補日本書紀卷之六



足利國繪田河原寺